不思議の冒険

明理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不思議の冒険

【Ｎコード】
Ｎ８３８２Ｈ

【作者名】
明理

【あらすじ】
ある日、星矢と理恵は空を飛ぶ不思議な少年・アレンに出会った。アレンに連れられてやってきた魔法の国・マジテリー。そこでは小さな少女が連れ去られるという事件が多発していた。そしてついにアレンの妹・アリアが謎の人物に連れ去られる。アリアを助けるために『禁断の森』へと向かった３人は女神・エキドナが復活したことを知り、３人はアリアを助けるため、女神・エキドナを倒すため、６つの自然の力・エナジーを集める不思議の冒険の旅にでる！

1話　空飛ぶ少年

「私はね？魔法の世界に行きたいの。おとぎ話にでてくる不思議な国！」

僕の隣で、きれいな女の子が目を輝かせた。

「それでね！その世界を冒険するの！いろんな人達を助けるための冒険！素敵でしょ？？」

「そうだね。とっても素敵だと思うよ。」

もう、何度も聞いた言葉（セリフ）だ。

――魔法の世界に行きたい――

それがこの少女、垣根理恵の口癖だった。

理恵は五年前、僕の隣の家に引っ越してきた不思議な女の子。

五年前、彼女はまだ8歳だったにもかかわらず、1人きりで住んでいた。

そのせいか、僕の親は彼女のことを気にかけ、よく夕食などに彼女を招いた。

その時から僕らはいつも一緒で、僕と理恵は兄弟みたいな関係だ。

2人でのんびりと夕焼け空の下、家路につきながら、

僕は毎日のように聞かされる言葉に半分うんざりと返事をした。

そしてまた、理恵がえんえんと魔法の国だとかの話をし始めたので、僕は軽くため息をついた。

あたりの家々からは夕飯のおいしそうなにおいがもれてきて、僕は理恵の話よりも今日の夕食について頭をいっぱいにしながら、ふと空を見上げた。

今日は晴天だったので、空は雲ひとつない明るいオレンジ色だ。

夕日が一日の終わりを告げているようで、ちょっぴりさびしい気持ちになった。

そんな感じで僕がちょっぴり大人ぶって哀愁を漂わせていた時、

信じられないものが目にはいった。

空に、箒にまたがった人が浮かんでいたのだ。

ありえない…

人が…飛んでる…??

目の錯覚かな?と、僕は目をごしごしとこすった。

しかし、それは変わらずに不安定に浮かんでいる。

いや、これは夢だ…

だって人が空を飛ぶはずが…

次に僕は頬を思いっきりつねってみた。

じんじんとした痛みを頬に感じた。

ってことは…

夢じゃない…??

理恵は僕の奇妙な行動に気づいたようで話をやめて、顔をしかめて僕を見た。

「星矢??どうしたの??」

僕はポカンと口を開けながら空を指差した。

理恵は空に目をうつし、そして、目を大きく見開いた。

「人が…飛んでる!?」

その人は近くの山の上で止まり、ゆっくりと下に降りていった。

理恵はぱっと僕の方に振り返ると、興奮を隠しきれない顔で空を飛んでいた人がおりたった山を指差した。

「はやく!行こ!」

「えっ…でもはやく帰らないと母さんに…」

遅くなるとまちがいなく怒られる。

「いいから！」

けど理恵はそんな僕の気持ちも露知らず。

渋っている僕の腕をしっかりとつかんで勢いよく山に向かって走り出した。

「たしかこのへんにおりた気がするんだけど…」

あっという間に僕を山に連れてきた理恵はあたりをすみずみまで見まわした。

「ま、待ってよ、理恵…」

無理やりに理恵に連れられてきた僕は、息を切らしながら、よろよろと理恵についていった。

そのとき、

ガサッ！

草が大きく音を立てた。

とたんに理恵がとびあがり、すばやくその場所にかけだした。

草むらの中に理恵の姿が消えて、理恵の弾んだ声だけが聞こえた。

「星矢！多分こっち！ねぇ、はやくきてよ！」

「どうせ動物が動いたとかなんかの音だろ…？？」

僕はあきれながらも音がした草むらの中にはいっていった。

すると…

「ねぇ、見て！この人だわ！」

そこには明るい金色の髪をした少年が地面につっぷしていた。

僕は最初、その少年が空を飛んでいた人だとは思わなかったが、そばに箒が少年と一緒に横たわっているのを見て、半信半疑ながらも興味を持った。

「じゃ…この人がさっき空を飛んでいた人…？？」

僕らが少年に注目していると、少年が小さくうめき声をあげて目を覚ました。

「うう…いてて…」

少年は上半身をおこして腰をさすりながら、ふと顔をあげた。

ブルーの瞳があたりを見まわし、そして僕たち2人に目をとめた。

少年は一瞬僕らの存在が認識できなかったようにポカンと口を開け、じっと僕らを見つめた。

少年の顔が、だんだんと青ざめていった。

「や…やばい…」

少年はつぶやくと、キョロキョロと周りを見わたし、自分の乗っていた箒を見つけると、急いでつかんで、立ち上がった。

多分、この場所から一刻もはやく逃げだそうとしているんだろう。

けど、そんな少年の腕を理恵が急いでつかんだ。

「待って！」

少年はなんとか理恵の手を振りほどこうともがいたが、理恵のすごい力には勝てなかったらしく、蒼白の顔のまま振り返った。

「…何か用？？用がないんなら僕ははやくここからはなれたい気持ちでいっぱいなんだけど…」

そんな少年を理恵は満面の笑みを浮かべて見た。

「ねぇ！単刀直入に言うけど、あなたさっき空を飛んでたよね！？」

少年の顔が更に青くなった。

「そ、空を？？と、とべるわけないじゃないか。君は何か見間違いでもしたんじゃないかな？？」

それでもなんとか言い訳する少年を見て、理恵は少しイライラした

ようにそばの箒を指差した。

「ほら！あれにまたがって、飛んでるとこを見たのよ！？」

「そ…それは…」

少年は助けをこうように僕の方をちらりと見た。

けど僕は、少年のことなど考えずに、舐めるように少年を見た。

あらためてじっくりと見てみると、その少年はとてつもなく奇妙だった。

外国人のような澄んだブルーの瞳に、明るい金色の髪。

それだけでも十分目立つのに、少年は更に奇妙な姿をしていた。

まるで、おとぎ話やゲームでてくるような皮の服を着ていたのだ。

緑のシャツは少し丈が長く、腰のあたりを木のツルのようなひもでむすんでいる。

そこには短剣と、古そうな木の棒がはさみこまれており、その上から暗い深緑のマントを着ていた。

本当に、おとぎ話のキャラクターみたいだ…

「ねぇ！ほんとは空、飛んでたんでしょ！？」

理恵はさらに少年を問いただした。

「と、とんでないよ…」

困ったように首をふる少年がだんだんかわいそうになってきて、僕はとりあえず話題を変えてあげようと思った。

「君、名前は??」

理恵の興奮した声の雨が止まった。

少年はほっとしたように僕の方を見、理恵の方を見ないようにして答えた。

「僕はアレン。」

「アレン??」

理恵が繰り返した。

「おかしな名前ね。ね!どこからきたの??もしかして魔法の国!?ね、そうでしょ!?」

アレンはビクッと体をふるわせ、視線をあちこちにさまよわせた。

「えっと…それは…」

そのとき、アレンのそばに光輝く鏡が現れた。

「な、何!?」

理恵は驚き半分と喜び半分で輝く鏡を見つめた。
アレンは蒼白だった顔からますます血の気が失せ、その場から逃げだそうとした。
けどその体は鏡からでた光に包まれ、アレンは身動きもとれずじたばたと暴れながら小声で何かをつぶやいていた。
「どうしよう…どうしよう…母さんが…母さんが…！！」
鏡にアレンに似た金髪碧眼の美少女がうつった。
びっくりして後ろを振り返って見たが、少女の姿はない。
けど鏡にはたしかに怒ったような顔をした少女が映りこんでいる。
『アレン！鏡を使っちゃダメってあれほど言われてたでしょ！』
鏡から高い声が響いた。
「ご、ごめん…つい…母さんには言わないで！！」
『分かってるわ！見つかるまえにはやく帰ってきて！！』
アレンは急いで箒をしっかりとつかみなおすと鏡に手をのばした。
すると、信じられないことに、アレンの触れた手が、鏡の中に吸いこまれていった。
アレンはずぶずぶと体を鏡の中に消していき、ぼくたちがポカンと

見ている間にあっという間に体の半分を鏡の中に消していった。

そこで理恵がはっとしたように顔をあげ急いでアレンのまだ鏡からつきだしている左手をつかんだ。

「えっ、理恵!?」

「星也!早く!」

驚いている僕の手を理恵がつかんだ。

アレンは僕らが手をつかんでいるのに気が付いていないようで、僕たちごと左手を鏡の中にしずめた。

僕らは鏡の中にひきこまれ、光の世界へ落ちていった…

1話　空飛ぶ少年（後書き）

初めてファンタジー小説に挑戦します！
不思議な場面をうまく表現できるかわかりませんが…
よろしくおねがいします＞m（__）m＜

2話　魔法の世界

待って…た…

暗闇の中で声が響いた。

待って…いた…

声はうれしそうで、どこからか誰かに見降ろされているような変な気持ちがした。

僕を見降ろしているのは…

その声は…

誰…??

ピカッ！

急に目にまぶしい光が飛び込んだ。

「う…」

ゆっくりと目を開けてみると、僕はキラキラと輝く湖のそばに横たわっていた。

「ここは…??」

上半身を起こすと隣で理恵がすーすーと寝息をたてているのが分か

った。

僕はどうしてここに…？？

ぼんやりとした頭に急にさっきの場面がなだれこんできた。

空を飛ぶ人の姿…

金髪碧眼の少年・アレン…

そして輝く不思議な鏡…

たしか僕は理恵に手をつかまれて…

ってことは！

ここは鏡の中の世界！？

「ん…」

隣で理恵がうめく声が聞こえた。

理恵はぼーっとした顔でおきあがると、ぼんやりとあたりを見回し、息をのんだ。

「こ、ここって…」

「2人とも気がついたみたいだね。」

金髪碧眼の少年が僕たち2人を見た。

隣には同じく金髪碧眼の少女がいる。

「アレン、どうするの??」

少女がアレンにイライラと問いかけた。

「『向こう』の世界から人を連れてきてはいけないのよ!?分かってるの!?」

「僕は連れてきた覚えなんかない!この人達が勝手についてきただけだ!」

アレンの声には少し怒りがこもっていた。

アレンは僕たちに向きなおるとはぁっとため息をついた。

「あのさ…君たちどうして僕についてきたの??」

「それは…」

「あなたの世界に行ってみたかったから!!」

僕が言い終わらないうちに理恵が興奮した声で言った。

「私、魔法の世界に行ってみたかったの!ねぇ、ここって魔法の世界なんでしょ!?」

理恵は息をはずませ、アレンと少女を直視した。

アレンと少女は困ったように顔を見合わせ、理恵を見た。

「えっと…魔法の世界というか…」

「ここはマジテリーよ。」

少女がはっきりといった。

「あなたたちの住む世界とは違う世界。あなたたちは本当はこの世界にきてはいけないの。でもこのバカ兄が…」

少女はアレンを睨んだ。

アレンは少女の視線から逃れるように別の方向に視線をうつした。

「まぁ、きてしまったのは仕方がないわ。」

ため息をつきながら少女は僕たちの後ろにある湖を指差した。

「一応説明するとね？あの湖があなたたちの世界とつながっているの。で、このバカが興味半分でその湖にとびこんだってわけ。」

「じゃぁ…僕たちはあそこに飛び込めばもとの世界に戻れるってこと…？？」

理恵がキッと僕を睨んだ。

きっともとの世界などに帰りたくないと思っているんだろう。

けど、僕たちはこの世界にお呼びではないようだ。

僕は一刻もはやくもとの世界に戻りたかった。

「そうなら最高なんだけど…」

アレンが苦笑いした。

それを見て少女は少しむっとし、ため息をついていった。

「残念ながらそれがムリだから困ってるの。この湖は満月の夜しか『向こう』の世界につうじないのよ。」

理恵の目が輝いた。

「ってことは、私達は次の満月の日までこの世界にいなきゃいけないってことよね！？」

「まぁ…そういうことなの…だから、」

少女がちらっとアレンの方を見た。

アレンは急いで少女の言葉を引き継いだ。

「それまで君たちに嘘をついてて欲しいんだ！」

「嘘…？？」

アレンはこくっとうなずいた。

「さっき僕が箒で飛んでるのを見たろ？僕たちは魔法が使える。」

まだまだ半人前のくせに…少女がぼそっとつぶやき、理恵が目を更にキラキラさせた。

「君たちをここに連れてきたのは、意図的ではないといえ、僕の責任だ。」

少女が力強くうなずいた。

「ってことで、君たちはしばらく僕たちの家にいてもらっていい。その変わり、僕たちの家族に君たちが『向こう』の世界からきたってことを言わないでもらいたいんだ。」

「ええ、わかったわ！」

理恵はとびきりの笑顔でうなずいた。

アレンはそれに気をよくしたように軽くほほえんだ。

「ありがとう！じゃぁ君たちは違う国からきた僕たちの友達ってことで！いい？」

理恵がこくこくと何度もうなずくのを見て、僕も軽くうなずいた。

「うん！よし、とりあえず自己紹介だ。僕の名前は…ええと、さっきも言ったよね？」

「アレンでしょ？？」

理恵がすばやく言った。

アレンはうなずき、次に少女に目をうつした。

「こいつは僕の妹でアリア。」

アリアが軽く会釈したので僕も一応軽く頭を下げた。

「えっと…君たちは??」

理恵は待ってましたとばかりに口を開いた。

「私は理恵。垣根理恵!」

「カキネ…リエ…??リエでいい?」

「ええ!」

理恵はにっこりとうなずいた。

「で、君は??」

アレンのブルーの瞳が僕を見た。

「ぼ、僕??僕は星矢。」

「セイヤ??…うん。オーケー。セイヤだね?」

アレンは突然笑いだした。

アリアもかすかに笑っている。

「どうしたの??」

「いや…リエとセイヤって…おかしな名前だなって思って…」

「君たちの名前の方がよっぽどおかしな名前だよ。」

僕はそっけなく言った。

皆、なぜか声をあげて笑った。

そんな風にしていつの間にかうちとけていた僕たちは、アレンとアリアの家に案内された。

「もうすぐだよ。僕たちの家は少し町から離れたところにあるんだ。」

アレンは森の奥を指差した。

アレン達への家へ行く道中は、すでに不思議でいっぱいだった。

森にはたくさんの花が咲いていて、川は太陽の光をうけ、キラキラと輝いている。

小鳥達は僕たちを見て囁き合い、ある鳥は歓迎するように僕たちのまわりで飛んだ。

鳥の飛んだあとは鮮やかな色とりどりのキラキラと輝く軌跡が残り、そのたびに理恵が声をあげた。

動物達はほとんどが奇妙な姿をしており、中でも一番目をひいたのが白い馬の背に輝く白い翼を持つ動物の群れだ。

アレンに訪ねてみると、それは『ホワイトウィング』という動物らしい。

そんな感じで僕がまわりの様子にみとれていたとき、

「もしかして…アレンとアリアって、王子様やお姫様とかだったりする??」

理恵がいきなりアレンとアリアを交互に見て言った。

実は僕も思っていたことだ。

物語やゲームなどの王子様やお姫様は大体は金髪碧眼をしている。

そして2人はその通りの見事な容姿だったからだ。

「王子様やお姫様??」

アリアが驚いたように理恵を見た。

逆にアレンは笑みをこぼした。

「やっぱりそう見える??」

僕たちは同時にこくりとうなずいた。

それを見てアレンはますます笑顔になった。

「実はそうなんだ。…と、いいたいところだけど…あっ、家が見えてきた。」

アレンは笑顔のまま目の前を指差した。

そこには木々に囲まれひっそりと立った小さな小屋があった。

小屋もまた、おとぎ話にでてくるような木の小屋で、まさに手作り感満載だった。

「あれが僕たちの家だよ。王子様やお姫様が住んでいるお城に見えるかい？？」

僕たちは同時にぶんぶんと首を横にふった。

「そうだ。僕たちはそんなんじゃないよ。ただの平凡な一般市民さ。」

「そうよ！王子様やお姫様！？嗚呼、なんて恐れ多いのでしょう！！」

アリアはかな切り声をあげ、長い髪を揺らしてぶんぶんと首を振った。

「そんな否定しなくても…さぁ、きて。母さんたちに紹介するよ。」

僕たちはアレンに率いられ、小屋の中に足を踏み入れた。

「母さん、ただいま。」

アレンが言うと、小屋の中にいた人のよさそうなおばさんがにっこりと笑ってこちらを向いた。

「あら、お帰り！アレン、アリア。まぁ、その人達は？」

おばさんは僕と理恵を交互に見て言った。

やっぱりおばさんもアレンやアリアと同じ金髪碧眼だ。

やっぱりおとぎ話の女王様のように見えた。

「えっと…この人たちは僕の友達でリエとセイヤっていうんだ。」

僕たちはそろってぺこりと軽くおじぎした。

「まぁ、変わった名前ね。どこからきたの？？」

「えっ？？そ、それは…」

アレンの言葉がつまった。

いきなり痛いところをつかれて、困ったような表情だ。

それを見てアリアがフォローするように言った。

「マジックストーンよ。」

おばさんはポンと手をうちほほえんだ。

「ああ、あの山の向こうの国ね。あの国はいい所よ。」

「はい！とてもいいところですよ？」

理恵も笑顔で言った。

僕も一応小さくうなずいた。

「2人はここに旅行にきたんだって。でも泊るところが見つからないらしくって…しばらくここに泊まってもらってもいいかな？？」

「ええ、ええ！大歓迎よ！そうね、じゃぁそっちの…セイヤだったかしら？？セイヤはアレンの部屋で、リエはアリアの部屋を使いなさい！」

「えっと…はい。ありがとうございます。」

僕は軽くおじぎをした。

「じゃぁ僕たちはセイヤ達を部屋に案内してくるよ！」

僕たちはアレンに連れられて2階のアレンの部屋にはいった。

「アレン！うまい嘘だったわね！見直したわ。」

アリアは笑顔でアレンをほめた。

「いや、マジックストーンからってのもなかなかいい案だったよ。これで母さんにはばれなかっただろうな？」

アレンは少し照れたように笑いながら言った。

「ええ、きっとばれていないわ！あっ、リエ、私の部屋はこの部屋の隣よ。」

理恵はにこっとうなずき、まちきれなかったように言った。

「ねぇ、さっそくなんだけど…魔法使ってみて！」

アレンとアリアはキョトンとして理恵を見た。

やがてアリアが笑いだした。

「魔法??いいわね！アレン、使ってあげて！とーっても簡単なのでいいから！せいぜい家を消しちゃったりしないようにお願いするわ！」

アレンはすねたように顔を真っ赤にさせ、腰にさしていた細い木の棒をぬいた。

「黙れよ。アリア。僕だってまったく魔法が使えないわけじゃないんだ。」

アレンは近くにあった『魔法呪文・初級』という本をつかむと、ペラペラとページをめくった。

「…よし、これだ。」

アレンはクッションに向かって杖をむけた。

「風よ、我が意志を成せ。ウインドゥフロート」

アレンがぽつりとつぶやいたと思うと、部屋に突風が吹きぬけた。

だけど、風はアレンの持っていた本のページをペラペラとめくっただけだった。

「…えっと、何をしようとしたんだい？？」

僕が苦笑いで聞くとアレンは罰の悪そうな顔をした。

「あのクッションを浮かばせようとしたんだ。」

「やっぱりできてないじゃない！」

アリアが大声で笑いながら言った。

「ねぇ、じゃぁアリアはできるの！？やって見てよ！」

理恵が目を輝かせて言った。

アリアは肩をすくめた。

「ごめんなさい。残念だけど、魔法は１３歳になるまで使うことはできないの。アレンは今年でやっと使うことができるようになったのよ。まぁできてないけどね！」

「アリア、黙れって言ってるだろ。」

アレンの顔がまた赤くなった。

「うーん…うん。ねぇ、アレン、杖貸してね。」

アリアはアレンの言葉を無視してアレンの手から杖をとりあげた。

「一回やってみるだけだから！母さん達には言わないで！」

アリアは人差し指を口元にあててウインクした。

そしてさっきアレンが杖を向けたクッションに向かって杖をむけ、アレンと同じ呪文をつぶやいた。

「風よ、我が意志を成せ。ウインドゥフロート」

ふわっ…

クッションがふわふわとゆっくり浮かんだ。

「アレンの方にとんでけ！」

アリアが軽く杖をふり、杖をアレンの方に向けるとクッションはまっすぐアレンの方に飛んでいった。

「うわっ！？むぐぅ…」

クッションはみごとにアレンの顔に直撃し、アレンはうめいた。

僕たちは大声で笑い、アレンはクッションをつかんでアリアに投げつけた。

「アリア…！！」

アリアはヒョイっとクッションをかわし、兄にむかってべーっと下をつきだした。

「あらぁ？手で投げるんじゃなくて魔法でなげたら？？だってあなたは『魔法が使えないわけじゃない』んでしょ？？」

「こいつ…！許さないぞ！！」

アレンが立ち上がってアリアに殴りかかろうとしたので、僕はあわててアレンの手を押さえた。

「や、やめなって！アリアもからかうなよ！」

「だっておもしろいんだもん！」

まったく人の苦労を考えない兄弟はきっと睨みあった。

やがてアリアはふんっとアレンから目をそらした。

「もぅいいわ！こんなバカ兄！リエ、行きましょう！」

「えっ！？待って！」

アリアはキョトンとしていたリエの手を引いてつんけんと部屋を出ていった。

「はぁー。ったく、なんで僕の妹はあんながさつなんだろう…？？」

アレンはその様子を見届けてからゴロンとベッドに横になった。

「それでも殴りかかろうとすることはないだろう？？」

僕はその横に腰掛けながら言った。

「本当に腹がたったんだ。大体あいつは…」

アレンが言いかけた時、

ガシャン！！

ものすごい大きな窓ガラスの割れる音と、アリアと理恵の大きな悲鳴が聞こえた。

「アリア！？」

「理恵！？」

僕達は同時に立ちあがり、顔を見合わせて急いで隣の部屋に向かった。

「アリア！リエ！大丈夫か！？」

アレンが叫びながらドアをあけて中にはいると、そこには割れた窓ガラスと、荒らされた部屋、そして力なく座り込む理恵の姿があった。

けれど…

「アリア！アリア！」

部屋から、アリアの姿は消えていた。

変わりにアリアが取り上げていたアレンの杖だけがその場におちていた。

2話　魔法の世界（後書き）

アリアが連れ去られました。
中途半端な終わり方です；

3話　冒険の始まり

「アリアと部屋にはいった瞬間にね？窓が割れて、いきなり黒いフードをかぶった人が入ってきたの。そしてその人がアリアをかかえて…そのままでていっちゃった…」

理恵はふるえながら今おきた出来事を離した。

アレンは一部始終を聞き終わるとドンと拳で壁を叩いた。

「くっそ…ついにアリアも…」

「ついにって…他にも誰かが連れ去られたりしているの？？」

「…ああ。最近マジタリ―ではアリアくらいの小さな少女が連れ去られるって事件が多発しているんだ。しかも…その連れ去られた少女達が帰ってきたという例はない。」

「嘘…！じゃ、アリアは…」

理恵があっと口をおさえた。

アレンは考えるように黙り込むと、ふいに口をひらいた。

「ねぇ、リエ。その黒いフードの奴ってアリアをかかえてどこに向かったんだ？？」

理恵はふいをつかれて一瞬とまどったがすぐに答えた。

「えっと…ここからまっすぐいったちょうどあの湖の方…」

「…『禁断の森』か…たしかにあそこなら隠れるのにちょうどいい…よし。」

アレンは何やらぶつぶつとつぶやいて、そして決心したように強くうなずいた。

「僕…アリアを助けに行く。」

そう言ったアレンの体はぶるぶると震えていた。

きっと『禁断の森』という場所はそれほど恐ろしい場所なんだろう。

アレンが杖を拾い上げて部屋をでようとしたのを見て僕は慌てて呼びとめた。

「待てよ。1人で行くのか??」

アレンはこくりとうなずいた。

「そんなのダメよ。私達も行くわ!!」

理恵が立ちあがって言った。

「…ダメだよ。『向こう』の世界の君たちをまきこんじゃいけない…」

「いいんだ。だって僕たち、もう友達だろう??」

「えっ…？？」

アレンはキョトンと僕の顔を見た。

「助け合うのが友達だ。だから僕たちも行く。僕たちもアリアを助けたい。」

「そうよ！それに、私一回冒険ってしてみたかったの！」

理恵は目を輝かせた。

「…でも、きっとすっごく危険だよ？？すっごい危ない目にあうかもしれない…」

「いいよ！僕たちはアリアを助けたいんだ！」

アレンの顔が喜びと驚きでいっぱいになった。

「…うん。分かった。一緒にアリアを助けに行こう！」

そういうことで、アリアを助けに行くことを決めた僕達は、とりあえず荷造りを始めることにした。

アレンは小さな巾着袋を3つ出して僕と理恵にわたした。

「これ、魔法がかかってて見た目は小さいけどすごいたくさんものがはいるんだ。」

アレンはそう言いながら、本棚にあった『魔法呪文・初級』『魔法呪文・中級』『魔法呪文・上級』の本を巾着袋におしこんだ。

それぞれ分厚い本だったのにそれらはすんなりと小さな巾着袋に吸いこまれていった。

「なるほど、すごいなぁ。」

僕は関心しながら巾着袋を見ていたが、ふとあることに気がついた。

「ねぇ、君の武器はその杖と短剣でいいかもしれないけどさ…僕たちの武器はどうするの??」

ピタッとアレンの荷物を詰め込む手が止まった。

「そうよ。私達手ぶらでいっちゃ危ないわ!」

「うん。それもそうだ。すっかり忘れてたよ…そうだ!僕についてきて!」

アレンはしっかりと必要なものをつめこんだ巾着袋のひもをしばるとドタドタと階段をかけおりていった。

僕と理恵はあわててそのあとについていった。

「…よし、偶然母さんは外にでてるみたいだ…」

アレンは母親がいないかしっかりと確認してから台所の床にあった扉をあけた。

「たしかここから地下にいけるはず…あっ!やっぱり!」

アレンの読みどおり、扉の中は階段になっていて、暗い地下室に続いていた。

「ここをおりていけば父さんの武器庫にいけるはずなんだ。」

僕たちはアレンに続いてそぅっと階段を降りていった。

しばらく降りると、木でできた古そうな扉が見えた。

僕たちはその扉をあけ、中にはいった。

「うわぁ！すごい！」

中を見て理恵が感嘆の声をあげた。

そこには古今東西のいろいろな武器がおさめられていた。

「ここから好きなものを選んでいきなよ。大丈夫！きっと父さんは気づきやしない！」

「本当に！？じゃ、私はこの杖がいいわ！」

理恵は試験管立てのようなところに立てられた何本かの杖のうちの一つをとり、軽く振った。

杖から火花が散った。

「うわ！すごい！リエには魔法使いの素質があるんだよ！きっと魔法が使えるようになる！」

それを見てアレンは興奮したように言った。

「嘘！？本当？？やったぁ、私、魔法が使えるようになるんだ！」

理恵は飛び跳ねて喜び、杖をぶんぶんふって火花をおこした。

「セイヤは何にするか決まった？？」

アレンが近くの本棚にあった古ぼけた『強力呪文・高度呪文全集』とかいう本を手にとりながら言った。

その本の呪文を使うときがはたしてアレンに来るのだろうか？と思いながらも、僕はとりあえず武器庫の中を見回してみた。

すると、ふと大きな剣が目に入った。

その剣はとても立派なもので、柄は金、刀身は銀でできており、柄の部分には黄金色に輝く大きな宝石がはめられている。

なぜか、その剣を手にとってふってみたいという強い願望に襲われた。

「ねぇ、アレン。僕、あの剣でもいいかな？？」

「えっ？あれ？？別にいいけど…あんな重たそうなの、振り回せられるのか？」

「分からない…」

たしかにあんな重たそうなものを自分が振り回せられるはずがない。

それでも僕は、その剣を手に持って見た。
剣の柄をつかんだ瞬間、僕はなんだか変な感覚に襲われた。
まるで、剣が自分の一部になったかのように自由に動かせられる気がしたのだ。
ためしに持ち上げて見た。
すると剣は驚くほどすんなりと持ちあがった。
「うん…うん。これ、いけるよ。僕、これにする。」
きっとこの剣は僕がくるのを待っていたんだ。
自然とそんな風に思った。
「分かった。じゃぁ2人とも決まったみたいだね。それじゃ…出発しようか。」
アレンの顔はやっぱり恐怖に彩られていたが、その体は震えてはいなかった。
僕は剣をそばにあった塚を背中に背負い、そこに剣をおさめた。
理恵は腰にアレンと同じように木のツルでできたベルトをまき、そこに杖をおさめた。
アレンいわく、そうすることですぐに杖が取り出せるらしい。

僕たちは武器庫をでて、そして小屋をでた。
外は目がくらむほどに眩しくて明るかった。
「行こう。アリアを助けに！」
こうして僕たちの魔法の国・マジテリーを旅する不思議の冒険が始まった。

4話　ツタの門

僕たちは町をでて『禁断の森』へと続く小道を歩いていた。

「ねぇ、アレン。『禁断の森』ってどんなところなの??」

理恵がアレンの持っていた『魔法呪文・初級』の本をペラペラとめくりながら言った。

「分からないけど…すっごく危険なところらしい。正気の人間なら絶対いかないところだよ。だから、それだけに隠れるにはちょうどいい場所なんだ。」

「ふーん…楽しそうね!」

理恵は軽く杖を振った。

杖から花びらがとびでた。

「それ、どうやってやるの??」

アレンが驚いたように言った。

「んーと…軽く振ったら勝手にでてきた。」

「ふーん…」

アレンはうらやましそうにじっと理恵の杖を見ながら、自分の杖をふってみた。

アレンの杖からは何もでてこなかった。

「2人とも、そんなことはいいから！それより…」

僕はじっとまえを見た。

「ここからは、進めないと思うよ…？？」

理恵とアレンも目の前を見てぎょっとした。

道の両脇に大きな木がはえていて、そして僕達の行く手をはばむかのようにツタがからまりあって大きな壁をつくっていた。

「何…？？この壁…！」

理恵が驚きの声をあげた。

「きっと…この奥が『禁断の森』だ。」

理恵とアレンがごくりとつばをのんだ。

「…よし、僕やってみるよ。」

アレンはコホンと軽く咳をして、杖を目の前のツタの壁に向けた。

「炎よ、焼き尽くせ。ファイヤーバーン」

アレンの杖がわずかに光った。

「やった??…ってあつっ！」

アレンのマントに火がついた。

「アレン！大丈夫！?」

僕は急いで水筒の水をアレンのマントにかけた。

なんとかマントの火は消火され、アレンはへたりと座りこんだ。

「はぁ…びっくりした…ありがとう。セイヤ。」

「うん。ほんとこっちもびっくりしたよ…」

僕は水筒のふたをぎゅっとしめた。

今のでもう全部なくなってしまったらしい。

もし水が手に入らない状況に陥ったらアレンの水筒をふんだくろうと思った。

「よし、次は私がやるわ。」

理恵が『魔法呪文・初級』を片手に杖を振った。

「風よ、切り刻め。ウインドゥカット」

理恵のまわりにふわっとした風が巻き上がりツタの壁に突進していった。

「よし！いける！」

アレンが喜んだのもつかのま、風はツタに跳ね返されるようにこっちに向かってきた。

「わっ！」

理恵はしゃがみ僕は横っ跳びによけた。

アレンはよけきれずマントがズタズタにさかれた。

「うわー…マントがボロボロだよ…」

アレンはズタズタに引き裂かれたマントをぬいで巾着袋の中にいれた。

「ごめんなさい！それにしても…この壁、魔法が跳ね返るみたいね。」

理恵がツタの壁に触れて、興味深そうに言った。

「どうしよう、それじゃぁ入れない…」

そのとき、ふと思いついた。

まぁ、魔法がきかないのならこれも同じだと思うけど…

「2人とも、下がっててて。」

僕は背中から大剣をひきぬくとかまえた。

剣はなめらかに動き、剣がツタに触れるとツタは自然と引き裂かれた。

僕は驚いてツタの壁にどんどん剣をふるった。

あっという間にツタの壁は取り払われ、3人がとおれるくらいの大きさの道ができた。

「す、すごいよ、セイヤ…」

理恵とアレンは感嘆の声をあげ、僕は背中に剣をおさめた。

「よし、行こうか。」

僕は穴から見える真っ黒な森の様子を見て、ごくりとつばをのんだ。

理恵とアレンもごくっとつばをのみうなずいた。

そして僕たちは真っ暗な『禁断の森』の中に飛び込んでいった。

4話　ツタの門（後書き）

短くなってすいません＞m（__）m＜

5話　禁断の森

『禁断の森』はとても不気味なところだった。

木々がしげっているので太陽の光は森の中には入らず、森の中は真っ暗だった。

木はなんだか僕らを見降ろして僕らの動きを見張っているように見えて気味が悪かった。

そして…

分からないけど、なんとなく感じる奇妙な違和感。

「真っ暗だね…」

アレンがおびえたようにいった。

「だからどうしたの??さっさといきましょう!」

理恵はイライラしたように先頭を歩いた。

僕は理恵を見失わないように理恵にぴったりくっつくようにして歩いた。

「ま、待ってよ!」

アレンが後ろから慌ててついてくるのが分かった。

目がだんだん慣れてきたところで、僕は理恵を呼びとめた。

「理恵、ちょっと待って。」

理恵の足が止まり、怪訝そうに僕を振り返った。

「何??」

「アリアはどこにいるんだと思う??このまま奥へ奥へと進んでいくのは危険だと思わない??」

理恵は考え込むように目線を斜め上に向けた。

「そうね…それもそうだわ。でも、どこにいるかなんて…」

そのとき、急に理恵が身震いした。

「ねぇ…なんだかこの森、嫌な感じがしない??」

「嫌な感じ…??」

理恵がこくりとうなずいた。

「なんだろう…??ええ、そうだわ。この森、動物の気配が一つもしないの。」

…そうだ。

この森の奇妙な違和感はそうなんだ。

『動物の気配が一つもしない』…

この森からは鳥のさえずりも、草が動く音さえ一つもしないんだ。

「言ったろ??ここは『禁断の森』なんだ…僕、どうして『禁断の森』って言うのか今わかったよ…」

アレンはガクガクと体を震わせながら叫ぶように言った。

「ここは生き物が入ることを許さない『禁断の森』なんだ!!」

アレンの声とともに木がざわざわと激しく動いた。

クスクス…クスクス…

「何!?これ!!」

急にささやくような笑い声が森中に木霊した。

そして木が、まるで手足が生えたかのように一斉に動きだし、僕達のまわりを囲んだ。

「取り囲まれた!」

僕が叫んだのと同時に、木達がクスクスと囁きだした。

≪どうする?こいつら!≫

≪キャハハハッ!もうダメだ!≫

≪この森には生き物はいらない！僕達を傷つけるものはいらない！≫

≪侵入者よ！必至で命ごいするがいい！おまえ達はもう逃げだすことは不可能だ！≫

「木、木がしゃべってる！？」

アレンの明るいブルーの瞳が恐怖に彩られた。

理恵は恐怖の悲鳴をあげ、杖をぬいていた。

≪親方が到着するぞ！みんな道を開けろ！≫

ある木の一言で木々がサーッと大きな道をあけた。

そこからまわりの木と比べてはるかに大きい大木が、根をうねらせてこっちに向かってきた。

僕はとっさに背中から剣をひきぬき、かまえた。

≪この森に無断で侵入したというのはおまえらか？？≫

大木が言った。

≪なぜ、きた？人間はめったにここに近づかない…≫

アレンが拳を握り締めた。

そしてすぅっと息を吸いこんで、吐き出すように言った。

「僕達は妹を助けにきた！妹はどこだ！？」

≪妹…だと？？≫

大木が嘲笑うかのように言った。

まわりの木々達もクスクスと笑った。

≪我らはおまえの妹など知らぬ。同時に、もしその妹がこの森にはいったとしたなら、もうこの世にはおらぬな。≫

木々達がさらに大声で笑った。

アレンの顔が怒りで真っ赤になった。

「ウソだ！アリアはどこだ！？言わないと…」

アレンが大木に杖を向けた。

≪言わないと…どうするんだ？？≫

大木が嘲笑った。

アレンはきっと唇をかみしめ、呪文を唱えようとと口を開いた。

「ダメだ！アレン！」

僕は慌ててアレンを止めたが遅かった。

「地よ、かの者を捕らえよ！マッドアレスト」

僕は失敗すると思って目をつぶった。

しかし、アレンの魔法はまっすぐに大木に向かって飛んでいき直撃した。

アレンの魔法が…

今までずっと成功しなかった、アレンの魔法が…

成功した…

僕は驚き、ぼんやりと大木の様子を見ていた。

大木の根元の土がせりあがった。

それは大木を捕らえるかと思った。

しかし魔法は途中で止まり、アレンの方に向かってきた。

「アレン！」

アレンはその場から逃れようとしたが遅かった。

土がせり上がってきて、アレンの手足に巻き付き自由を奪った。

≪おまえはバカか？地のエナジーの保持者である我に向かって地属性の魔法を使うとは！≫

地のエナジー??

どういうことだ??
僕が考えている間に大木がアレンに向かって長い枝を振りおろしていた。
「うわぁぁぁぁ!!」
アレンが悲痛な叫び声をあげた。
僕は慌ててとびだして枝を切り裂こうとした。
ダメだ!
この距離からじゃ届かない!
思わず目をつぶったとき、
「風よ、切り刻め!ウインドゥカット」
理恵が枝に向けて杖を向けていた。
とたんに突風が吹き、大木の枝を切り刻んだ。
木々の笑い声や囁き声がピタリとやんだ。
そして大木の怒りにみちたうなり声が森中に響いた。
≪小娘…!よくも我の腕を…!!許さん!≫

木はシュルシュルと枝をのばし理恵の体をつかんで持ち上げ、ギリギリとしめつけた。

「きゃぁ…ぁぁ…！！」

理恵は苦しそうにうめき声をあげ、杖をとりおとした。

「理恵！！」

僕は大木の枝にしめつけられて苦しそうにうめく理恵と、自らの呪文で自由を奪われて、大木に襲われるのをただ待つしかないアレンを見て逃げ出したくなった。

そうだ…

もともと僕は違う世界の人間なんだ。

僕はアリアを助けないといけないと思うほどに親しい仲ではないだろう？？

そうだ、このまま逃げ出してしまえ。

今だ、大木が2人に気をとられている間に！

さぁ、行くんだ！

僕の中の弱い僕が叫んだ。

僕は一歩後ずさりした。

本当に逃げ出そうとしていた。

そのとき、ふと思った。

僕は…

危険にさらされている2人をおいて逃げることができるほどに弱い人間でいいのか??

…ダメだ!

僕は2人を助けて、アリアも助けるんだ!

僕は剣をもう一度強く握りなおした。

そしてアレンの自由を奪っている土を切り裂いた。

土は簡単に切り裂かれバラバラと音を立てて地面に落ちた。

「アレン!大丈夫かい??」

「ああ、うん!僕は大丈夫!それより理恵を…」

「分かってる!」

そう言ったものの理恵をつかんだ枝は高くまで持ち上げられている。

まさか僕が物語やゲームのキャラクターでもあるまいし、あそこまで飛び上ることができるとは思えない。

どうやってあそこまでいって枝を切り落とせばいいのだろう??
そうしている間にも大木はギリギリと理恵を苦しめている。
「セイヤ!僕にまかせて!」
アレンがぎゅっと杖を握り締めて僕のそばに立った。
「で、でも…君の魔法は…」
アレンは巾着袋をあけて箒をとりだした。
「大丈夫。君は僕が飛んでるところを見ただろう??」
アレンがパチッとウインクした。
「う、うん。わかった!」
僕はアレンの後ろにまたがった。
アレンが地面を蹴ると、箒はよろよろと浮かびあがった。
「アレン!理恵のところに!」
≪なんだ??目ざわりな!≫
大木が僕達に気がつき僕達を叩き落とそうと枝をふるった。
「うわぁ!セ、セイヤ!!」

大木の枝の猛攻撃で箒はぐらぐらと揺れた。
危うく枝に叩き落とされそうになったりもしたが、それでもなんとか箒は理恵のもとへと進んでいった。
「よし、アレン！もうちょっとだ！」
理恵をつかんだ枝がすぐ目の前にせまってきた。
理恵はもう意識を失ってぐったりとしている。
このまま枝を切り落としたら理恵は…
ふと下を見てみた。
地面までの距離は遠い。
こんなところにたたきつけられたら理恵の命は危ないかもしれない。
かといって、このまましめつけられ続けても、理恵の命は危ない。
どうすればいいんだ！
「セイヤ！はやく枝を切るんだ！」
アレンが叫んだ。
でも…切ったら…
…そうだ。

望みは少ないけれど…
これにかけるしかない！！
僕は剣を構えて叫んだ。
「アレン！僕が枝をきったら理恵に浮かび上がる呪文か何かをかけてくれ！」
アレンは一瞬固まった。
まさか自分がそんな重大なことを頼まれるとは思っていなかったらしい。
けど震えながら、こくりとうなずいた。
「うん、分かった。」
「よし！」
僕は理恵をつかんでいる枝に向かって思いっきり剣を振りおろした。
枝は真っ二つに折れ、理恵はそのまま下に落下していった。
「アレン！」
アレンは急いで理恵に向かって杖を向けた。
「風よ、浮かべろ！ウインドゥフロート」

アレンのまわりに風が漂い、まっすぐに理恵のもとに向かった。
風は理恵が地面にたたきつけられるギリギリのところで理恵を支え、ふわりと浮かびあがらせた。
「やった…成功した！！」
アレンの歓声とともに、箒に向かって新たな枝が降りおろされた。
「アレン！まえ！」
「え…？？うわっ！」
箒は急降下し、危うく振り落とされそうになった。
理恵を助け出したのはいいけれど…
どうすれば大木を倒せるんだ！？
そう思ったとき、大木の幹に1か所、変色している部分を見つけた。
直感した。
あそこが弱点だ！
きっとあの場所だけもろくなっているに違いない！
「アレン！あの大木の幹の変色している部分までつっこんで！」

「えっ！？この状況で！？わ、わかった！！」

アレンはなんとかおちていく箒の軌道を変えて、大木の幹に向けた。

≪くそっ！≫

大木は枝をのばし、なんとか阻止しようと僕達に向けた。

「枝は僕にまかせて、そのままつっこむんだ！」

僕は向かってくる枝を切り裂きながら叫んだ。

アレンはうなずき、木の幹に向かって猛突進した。

変色した部分まであと数センチ…

僕は剣をまっすぐに変色した部分にむけた。

そして…

グサッ！！

木の幹に思いっきり剣が突き刺さった。

≪ぐぁぁぁぁ！！≫

大木がものすごい叫び声をあげ、形を失っていった。

剣にすごい跳ね返そうとする力が加わる。

僕はそれに負けじと必至で剣を押さえつけた。

バンッ！

奇妙な大きな音がしたと思うと、大木が粉々に破裂していた。

大木の破片が木々達に振りかかると木々は動いて僕達を取り囲むのをやめ、もとのように道の両脇に根を生やした。

「やった…」

僕は呆然とつぶやいた。

箒がゆっくりと下におり、僕は地面に足を踏み下ろした。

地面に横たわっていた理恵が目を覚まし、ぼんやりと立ちあがった。

「何…??もう終わったの…??」

僕は力強くうなずいた。

緊張から解放された気分を存分に味わっている僕とは違い、アレンはキョロキョロとあたりを見回していた。

「アレン??どうしたんだい??」

「アリアは…どこ??あいつを倒したら戻ってくるんじゃなかったのか??」

アレンの顔はかすかに青ざめていた。

きっと最悪の予想をしているのだろう。

アリアが…

あの大木に殺されてしまったという予想。

そのとき、

「お主たち、ちょっといいか??」

後ろから低いしわがれた声がした。

振り返ってみると、ちょうど大木があった場所に小さな小人が立っていた。

小人は緑の服に緑の三角帽子をかぶっていて、本当に物語やゲームにでてきそうな容貌だった。

「お主たちに話たいことがあるのじゃ。」

6話　6人の精霊

「わしは地の精霊、ノームという。」

小人はゴホンと大きな咳をして言った。

小人は本当に小さくて、僕達は小人のまわりを囲むように座った。

「地の…精霊…？？」

「そうじゃ。ところで、聞いたところによるとお主たちはそいつの妹を探しているという。」

小人がアレンを指差して言った。

あっけにとられていたアレンは我にかえって身を乗り出した。

「あ、あの！僕の妹はどこにいるんですか！？この森の中にいるんですよね！？」

小人は手をつきだしてアレンを制した。

その体はとてつもなく小さいのに、なぜかそれは威厳があってアレンはピタリと話すのを止めた。

小人は満足したようにうなずき、顎髭をさすりながら言った。

「残念ながらお主の妹はこの森の中にはおらん。お主の妹は女神、エキドナに誘拐されたのじゃ。」

小人が女神、エキドナという言葉を口にした瞬間、アレンがビクッと反応した。

「女神…エキドナ…？？あの、人が…？？」

あきらかに声に恐怖がはいっている。

そんなに恐ろしい人物なのだろうか？？

「あの…女神、エキドナって…」

「お主ら！エキドナを知らんのか！？」

「えっ！そ、その…」

アレンがあきらかに慌てたように僕達を見た。

「こ、この2人はマジックストーンからやってきたんで、マジタリーのことはよく知らないんです！」

アレンは必至で言い訳をしたが小人はすべてを読み取ったというような顔で僕達を見た。

「ふーむ…まぁいいじゃろう。女神、エキドナとは数年前、このマジタリーを恐怖におとしいれていた魔女じゃ。」

「魔女？？で、でも、『女神』って…神様なんじゃないんですか？？」

気になってた部分に触れてみると小人はまた顎髭をなでた。

「神様…そうじゃな。昔は神々の一人じゃったんじゃ。しかし、自分1人が世界を支配したいという誘惑におそわれたことにより、神々に追放されたのじゃ。追放されたエキドナはこのマジタリーを支配してしまおうと考えた。そしてマジタリーの子供達をさらい、自分を敬いあげめるよう呪いをかけた。大人達に対しては自分に従わない者は容赦なく殺し、当時マジタリーはめちゃくちゃな恐怖の世界になったのじゃ。」

「で、でも…エキドナは5年前に勇者様によって封印されたはずじゃ…」

アレンがかすれる声にかすかな希望を混ぜて言った。

「そう、たしかにエキドナは5年前、ちょうど君たちが8歳のころに封印された。しかし、最近また子供がさらわれるという事件が発生しはじめた。」

小人はおもおもしく言った。

「エキドナは復活したのじゃ。その証拠に、わしはエキドナが送り込んできた怪物の中に閉じ込められた！」

僕はさっきの大木のことを思い出した。

それじゃ、ノームはあの大木の中に閉じ込められていたのか…

「きっと他の精霊達もわしと同じように怪物の中に閉じ込められているのだと思う。それでお主達に頼みがあるのじゃ。」

小人は軽く咳ばらいすると、僕が背中に背負っている剣を指さした。
「ちょっとお主、すまぬがその剣を見せてくれぬかの??」
僕は言われたとおり小人のまえに剣を差し出した。
小人は丁寧にその剣をすみずみまで見るとこくりとうなずいた。
「やはりこれはエキドナを倒した勇者、アルゴスのものじゃ。お主、どこでこれを見つけた??」
「えっと…その、アレンの、いや、この子の家の武器庫からです。」
僕はアレンを指差しながら言った。
「お主の??ほぉ、お主の父は何をしている??」
「あの…普通の武器集めが趣味のキコリです。」
アレンは少し顔を赤くして言った。
「ふむ。なるほど。とりあえずお主らに頼みたいこととはな…」
小人は剣の柄にはまっている黄金色の宝石をなでた。
「6つの精霊を助け出してそれぞれのエナジーを手に入れて欲しいのじゃ。」
「エナジー??なぁに?それ。」

理恵がきょとんとして言った。

「エナジーとは6つの自然の力、つまり、地、風、火、水、光、闇のパワーのことじゃ。エナジーはそれぞれ地の精霊…わしじゃな、風の精霊、火の精霊、水の精霊、光の精霊、闇の精霊が持っておる。お主たちにはそれを集めてまわって欲しい。」

小人は黄金色の宝石をコンコンと叩いた。

「この宝石は特別な宝石でな。6つのエナジーを集めたとき、初めてそのパワーをはっきする石なのじゃ。この石を埋め込んだこの剣だけが女神、エキドナに傷を負わせることができる。」

「この剣が…」

僕は少し驚いた。

まさかこの剣がそんなに特別なものだったなんて…

だから僕はこの剣に引き寄せられるような気がしたのか…

「そして6つのエナジーを集めたとき、エキドナのいる場所が分かる。そこにお主の妹もおるじゃろう。」

アレンがこくりとうなずいた。

「どうかな？引き受けてもらえるじゃろうか？？」

僕達3人は顔を見合わせた。

3人とも、気持ちはもう決まっていた。
僕達はうなずき合い、小人を見た。
「はい。僕達、やります。」
「おお、そうかそうか！！」
小人はうれしそうに顎髭を撫でた。
「それじゃ、さっそくわしのエナジー、地のエナジーをさずけようかの。」
小人はそういうと黄金色の宝石に手をかざした。
ポゥ…
緑の光があたりを包んだ。
緑の光は黄金色の宝石の真上で宝石と同じ丸い形になり、ゆっくりと宝石の中におさまっていった。
「うむ。これでよし。」
小人がうなずくと、あたりの緑の光が消えた。
僕はあらためて剣を握って見た。
なんとなく、何かのオーラに覆われている気がした。

「お主の剣に地のエナジーをさずけた。戦いのときには地のパワーがお主を手助けしてくれるであろう。」

小人は満足気に言うと、帽子の中から古臭い地図をとりだした。

「この地図をお主らにやろう。マジタリーの地図じゃ。それぞれの精霊の居場所が記されている。」

僕はその地図をうけとり、広げて見た。

理恵とアレンも横からそれを覗き込んだ。

そこにはマジタリーの地図がかかれており、それぞれ『禁断の森』、『風の洞窟』、『海の神殿』、『噴き出し火山』、『闇の迷宮』、『妖精の町』のところに赤いペケ印がつけられていた。

「その剣を見せれば精霊はそれぞれ事態を把握してくれるじゃろう。」

小人はそう言うと突然緑の光に包まれた。

「わしはエキドナに開放されたことを気づかれぬよう、別の木の中に身をひそめておく。お主らの健闘を祈っておるぞ。」

小人の姿がどんどん緑の光に包まれてみえなくなろうとしていた。

僕はそれを見て慌てていった。

「あ、あの！ありがとうございます！」

小人はかすかににこりと笑うと、近くの木の中にすいこまれていった。

とりのこされた僕達はもう一度地図を見た。

「…ここから一番近い場所は『風の洞窟』だね。」

僕は『禁断の森』から東にある赤い×印を指差した。

「行こう。」

僕は一言そう言った。

2人はこくりと強くうなずいた。

『禁断の森』は制覇した。

けど、僕らの冒険はまだ始まったばかりだったんだ。

7話　最初の夜

『禁断の森』をでると、もう日はしずみかけていた。
それでも、今まで真っ暗な森の中にいた僕達からしたら、昼間のように明るく思えた。
「ねぇ、今日はとりあえずここで休もうよ。僕、疲れた…」
アレンが手をだらりとたらし、その場に立ち止まった。
「えー！でもはやく行かないと！この世界の平和がかかってるのよ！？」
理恵はさっき大仕事をしたばかりだというのに元気いっぱいという顔をして、さきへ歩こうとした。
「いやだ！僕は絶対行かないぞ！ただえさえ、こんな恐ろしいことに巻き込まれたっていうのに…」
「じゃ、あなただけここに残ればいいわ！私と星矢の2人でさきに進むから！」
理恵とアレンがギャーギャーと口ゲンカをし始めた。
僕は2人ともよくそんな体力があるなぁと感心しながらその様子を眺めていた。
そうしていたら急に2人からつめよられた。

「ねぇ、セイヤは今日はここで休んだ方がいいって思うよね！？」

「いいえ！星矢！夜中歩いてもさきに進むべきよね！？」

そ、そんなこと僕に言われても…

まぁ、はやく先に進まないとと思う気持ちは山々なんだけど…

「ぼ、僕はアレンの意見に賛成かな。別にエキドナが明日襲ってくるっていうわけじゃないんだから。まずは体力を回復させるべきだと思う。次も恐ろしいことが待っているかもしれないよ！」

僕なりに精一杯説明したので理恵は納得してくれたみたいだ。

「ふーん…まぁ、そうね」

顔は納得していなかったが、一応同意の言葉を示してくれた。

まぁ僕的にはさっき説明した理由もあるんだけど…

本当のことを言うとさっきの大木との戦いで僕は精神的にも肉体的にもすごく疲れていた。

体がこれ以上動くことに拒否反応をおこしている。

だから正直アレンの意見に大大大賛成だったのだ。

「やった！じゃ、ここで休もう！」

アレンはブルーの瞳を輝かせると、テキパキと一晩をこす準備をしていった。

「そんな体力あるなら先に進めるじゃない…」

理恵はぶつくさと文句を言いながらもそれにならった。

まず、魔法がかけられた巾着袋から、本当なら絶対に入らないであろう大きな寝袋をとりだし、そしてアレンが家の冷蔵庫からかすめ取った食べ物の缶をとりだした。

「とりあえず今日はこれで大丈夫だけど…」

アレンが片手で缶を投げて遊びながら言った。

「『禁断の森』に行くだけだと思ってたし、最高でも2日くらいしかかからないだろうと思って2日分くらいしか食糧を持ってきていないんだ。だから明日までしか食糧は…」

「いいじゃない！そのときはそのときでなんとかなるわ！」

なんとなく機嫌が悪い理恵がつんけんと言った。

アレンはそんな言い方しなくてもいいじゃないかとでも言いたげな目で理恵を睨んだ。

「そうだね！それもそうだ！」

アレンも少し怒ったように言い返し、もう理恵とは話したくないとでも言うように理恵から離れて、禁断の森の近くにおちていた木を

拾いに行った。

理恵もつんとして、自分の寝袋の位置をこころなしか遠ざけている。

…あれ??

もしかしてこの2人、ケンカしてる??

そうなると僕はものすごい気まずい立ち位置にいることになる。

僕はどうしたらいいんだろう??

2人の仲をとりもつべきかな?

まぁ…

とりあえず、今はほうっておこう。

僕は思いっきりはなされておかれている理恵とアレンの寝袋の間に自分のそれをおき、そのそばに座り込んだ。

ちょうどアレンが木の枝をたくさん拾って戻ってきた。

「これから木がない場所に行くかもしれないから、一応余分に拾っておいたよ」

アレンはそう言うと持っていた木の4分の1くらいだけをその場に残してあとは巾着袋の中にしまいこんだ。

ふと自分の巾着袋を見て、この巾着袋はどれくらいものが入るんだ

ろうと思いながら、アレンの巾着袋の中はちらかっているだろうなと思った。

その間に理恵が『魔法呪文・初級』の本を見ながら、アレンの持ってきた木の枝をつみあげて杖を向けていた。

「炎よ、燃やせ。ファイヤーバーン」

理恵がつぶやくと杖から枝の山に向かって炎が吹き出た。

炎はたちまち枝を燃やし、温かい熱気を送ってくれた。

「まぁこんな感じかな？」

理恵は満足したようにそれを見て、それから得意気にアレンの方を見た。

アレンは悔しそうに理恵の起こした火を見た。

「僕だって…」

アレンはしばらく何やらぶつぶつとつぶやいていたが、空腹には勝てなかったらしく食糧の缶を3つ開けてそれぞれに配った。

「まぁ！これだけしかないの！？こんなのたりないわ！」

理恵は目の前におかれた缶詰のシチューを見て驚愕した。

「仕方ないだろ！？文句言うなよ！せめて食糧は大切に使わないと…」

理恵はアレンと食糧を交互に見て、ふいにアレンに杖を向けた。

「風よ、我が望むものを運びだせ。ウインドゥキャリー」

杖からふわりとした風がおこりアレンの巾着袋の中に入りこんだ。

やがて風は残りの食糧の缶をすべて背にのせて理恵のもとに戻ってきた。

理恵は風が運んできた缶を両手にかかえると見下ろすようにアレンを見た。

「ほーら。まだこんなにあるじゃない！よーし！今日は全部一気に食べちゃえー！」

理恵はそう言うと缶を全部下において杖を向けた。

「炎よ、燃やせ。ファイヤーバーン」

杖から炎が噴き出し、全ての缶のフタの部分だけをこがした。

「おい！何してるんだ！」

アレンは顔を真っ赤にさせて怒り理恵をにらんだ。

「これでもう明日から食糧はないんだぞ！？」

「そのときはそのときでなんとかなるわよ！ねぇ、星矢？」

また突然僕にふられた。

のんびりと座って2人の様子をとめようともせずに見守っていた僕は慌てて顔に笑顔をはりつけた。

「うーん…まぁ、あけてしまったものは仕方ないと思う。せっかくだから地のエナジー？収集記念ってことでパァーっとやろうか！」

「そうそう！星矢の言うとおりよ！」

アレンはぶすっとした顔をしたが、やはりアレンもお腹がすいていたらしい。

「…わかったよ。」

一言いうと、みんなで『いただきます』をしてから猛スピードで食べ始めた。

理恵は一瞬あっけにとられたようにポカンと口をあけていたが、ふんっと鼻をあらあらしくならして自分の分を食べ始めた。

僕は自分のシチューを口に運びながら少し不安になっていた。

だんだんケンカがひどくなっていってる気がする…

このままずっとケンカしたままだったらどうしよう…

なんとなく、これは6つのエナジーを集めることよりも大きな問題に思えた。

僕達は夕食を食べ終わるとまだ日が沈みきったばかりにもかかわらず寝袋にくるまった。

僕達の世界ではまだ夜も蒸し暑い夏だったけどマジタリ―の世界では季節はないらしい。

場所によって気候が違うらしいのだ。

このあたりは昼は春くらい温暖だが、夜になると冷え込むらしく寝袋にはいってもまだ少し寒かった。

けど僕はそんなことは気にならなかった。

とにかく疲れた体を休めるのが最優先だ。

きっと2人がケンカしているのも疲れているからだろう。

明日になったら2人とも機嫌が直って仲直りしてるさ。

僕は瞼を閉じた。

とたんに眠気が襲ってきて僕はあっという間に眠りについた。

7話　最初の夜（後書き）

サブタイトルと内容がマッチしておりません；
あと内容がごちゃごちゃです；

8話　風吹く岩壁

僕の予想は気持ちいいほどにはずれたようだ。

目が覚めて起きてみると、理恵とアレンが先に起きていた。

しかし2人は何も話さず、目も合わせようとしていない。

まだケンカ、続いてるんだ…

僕ははぁ…と深いため息をつきとりあえず顔に笑顔をはりつけた。

「理恵、アレン、おはよう！」

「「星也！（セイヤ！）おはよう！」」

2人はにこっと笑って同時に振り返り、同時に言った。

2人はそれに気がつくとお互いに火花が散るほど睨みあってふんっとお互いにそっぽを向いた。

あーあ…

今日一日（いや、それ以上続くかもしれない…）は僕は2人の間で板挟みになるってわけか…

僕はまたため息をつき、自分の寝袋を巾着袋におしこんだ。

寝袋は驚くほどすんなりと巾着袋の中におさまった。

「ごめんね、セイヤ。朝ご飯がないんだ。昨日誰かさんが余計なことしちゃったから！」

アレンが理恵に聞こえるようにこれ見よがしにいった。

理恵はむっとこっちを睨むと、つんとして近くの川まで歩いて行った。

理恵は川に杖を向けるとぶつぶつと呪文をつぶやいた。

「水よ、巻き上げろ。ウォーターロール」

水が竜巻のようにまきあがって同時に魚も巻き上げられた。

理恵は納得したようにうなずくとまた呪文を唱えた。

「土よ、我が望む形を作れ。マッドメイク」

地面の土が形をつくり、木の枝のような形になった。

理恵が続けて呪文を唱えた。

「風よ、動かせ。ウインドゥムーヴ」

風が木の枝のまわりにまとわりつきうながすように魚の口元へと動かし、一気に突き刺した。

魚は串刺しとなり、勢いよくピチピチとはねる動きが止まった。

そしてそれを片手で持ち、杖を向けた。

「炎よ、燃やせ。ファイヤーバーン」

炎がうまく魚の部分だけで燃え上がり、あっという間に魚の丸焼きができた。

理恵はこちらに近づいてくると僕にそれを三本手渡した。

「はい、星矢！朝食よ！」

「あ、うん…ありがと」

理恵はアレンに一本だけそれを手渡すとにっと笑った。

「実はね？昨日星矢が眠っている間に呪文の練習をしていたの！すごく上達して、もう『魔法呪文・中級』までにのっている魔法は全部使えるのよ！？」

理恵は僕に向かって話していたが、横目でチラチラとアレンを見ているのが分かった。

アレンは理恵にもらった魚の丸焼きをじっとみつめていた。

そしてごくっと唾をのみこみ、それを僕に押しつけた。

「僕、いらない。泥でつくった棒に刺さった魚なんていらないよ」

理恵はきっとアレンを睨んだ。

「なんなの！？あなたにはできないくせにそんなこと言わないで！」
アレンはびくっと反応し、思いきり理恵を睨んだ。
「な、何よ！」
理恵は一瞬たじろいたが強く言い放った。
「なんでもないよ。さぁ、それを食べ終わったら先に進もうか」
アレンはふいっとそっぽをむき、出発の準備をし始めた。
理恵はしばらくじっとアレンを見ていたが、顔をしかめて魚の丸焼きを食べ始めた。
僕は結局四本になってしまった魚の丸焼きを必至で口につめこみながら、どこかおかしいアレンの様子を眺めていた。
僕達は荷物の準備をてきぱきとすませるとまっすぐに『風の洞窟』に向かって歩きだした。
僕はケンカ中の理恵とアレンの間に挟まれていた。
理恵は『風の洞窟』についてだとか、これからの旅についてだとか、はきはきと僕に話しかけてきていたが、アレンは何も言わずに『魔法呪文・初級』の本を熱心に歩き読みしていた。
どのくらい歩いただろう？…いや、そんなには歩いていない。せいぜい2時間か3時間くらいだろう。

そろそろ休もうとしていたときに、目の前に大きな切り立った岩壁が立ちはだかった。

なぜかその岩壁のまわりだけ強い風が吹いており、のぼるのは困難そうだった。

「…きっとこの上が『風の洞窟』よね？？」

僕はこくっとうなずいた。

できれば他のもっと簡単に行ける場所に『風の洞窟』があって欲しいと思う。

けど、『禁断の森』にもツタが僕達のまえに立ちはだかった。

きっと、これからいく場所にも僕達のまえに立ちはだかるものがたくさんあるんだろう。

僕は崖の上を見上げて見た。

一番上までは驚くほどに距離がある。

こんなところ登れるわけがない。

けど、のぼらなくちゃいけないんだ。

「どうやってのぼる…？？」

僕がつぶやくと、今まで黙りこんでいたアレンが急に口を開いた。

「…そうだ。箒を使ったらどうだい??」

「箒??」

「うん。僕、多少なら箒を操れるし」

僕は『禁断の森』での大木との戦いを思い出した。

あのとき、アレンは不安定だったものの、大木の攻撃をよけながらうまく箒を扱っていた気がする。

「そうだね。よし、じゃぁ箒を使おう。理恵、いいね??」

理恵は何か文句を言いたそうだったが、箒の使い方は知らなかったらしい。

おとなしくこくりとうなずいた。

アレンは巾着袋から箒をとりだしまたがった。

僕はその後ろにまたがり、理恵は僕の後ろにまたがった。

「ちょっと!私、おちそうなんだけど!」

「少しだけだから我慢しなよ!」

理恵はぶつくさ言いながらまえにつめてきたので、僕は理恵とアレンにはさまれて少しきつかった。

「じゃぁ…行くよ」

アレンはすぅっと息を深く吸い込むと、足で地面を勢いよく蹴った。
箒がふらふらと不安定に浮かび、少しずつ上昇していった。
「ねぇ、アレン。大丈夫かい？三人ものせて…」
「うん、多分大丈夫」
そういうものの、箒は『禁断の森』で2人で飛んだときよりも危なっかしく揺れていた。
それでもなんとか上昇していたので、安心してほっと息をついたとき、
ビュォォォォ！！
急に強い風が吹いた。
「うわぁ！」
箒が風に吹かれてぐらぐらと勢いよく揺れた。
風は次々に吹いてきて、四方向すべてから同時に吹いて僕達を襲った。
箒は思いっきり風に翻弄され、くるりと宙返りしたり、横に大きく揺れたりし、何度も振り落とされそうになった。
「あ、アレン！！」

「箒が言うことをきかないんだ！」
アレンは箒に前のめりになんとかしがみついていて、操縦する余裕などなさそうだった。
「くっそ！」
そのとき、理恵が後ろからぎゅっと僕の腰をつかんだ。
「星矢！私の体、支えてて！」
理恵はそう言うと、杖を手に取った。
「う、うん！」
僕は理恵の左手をぎゅっとつかみ、僕の腰にしばりつけた。
「光よ、我を守れ！ライトプロテクト！」
理恵の杖から眩い光が飛び出し僕達を包んだ。
とたんに風は止み、箒は安定した。
「風が…止んだ…？？」
「光のシールドよ！長くはもたないからはやく上に！」
アレンはうなずき、ぐっと箒の角度をあげた。

理恵はまた杖を振り、呪文を唱えた。
「風よ、運べ。ウインドゥプログレス」
さっきの風とは違う強風が僕達を包み、上へと押し上げた。
「あともう少し…！！」
岩壁の頂上がすぐ目の前に近づいてきた。
もうすぐたどりつく…！
そのとき、また四方向からの強風が僕達を襲った。
「シールドが切れたんだわ！」
理恵は叫び、僕にしがみついた。
「理恵！もう一度魔法を！」
理恵は慌てて呪文を唱えようとした。
けどそれをアレンが止めた。
「やめろ！あともう少しなんだ！」
けど理恵はそのまま呪文を唱えた。
「光よ、我を守れ！ライトプロテクト！」

光が僕達を包み、四方向からの風が止んだ。

箒はまっすぐに頂上へとたどりつき、僕達は地に足を踏み下ろした。

「ここが…」

目の前には大きな洞窟があった。

洞窟の中は何もなく、しかし、中は暗闇ではなく青い光で満たされ、外からでも中の様子が見えた。

「『風の洞窟』だ」

8話　風吹く岩壁（後書き）

表現が甘い気がします…
しかも進行はやいです；

9話　風の洞窟

理恵とアレンは杖を、僕は剣をぬいて洞窟の中に入った。
洞窟には崖とは違い、やわらかい風が吹いていて肌をなでる風が心地よかった。
僕達はゆっくりと警戒しながら奥へ奥へと進んでいった。
「ここも…やっぱり生き物の気配がしない」
理恵がぽつりとつぶやいた。
たしかに…
ここは『禁断の森』と同じように生き物の気配がしなかった。
けどそれは『禁断の森』のような奇妙な感じではない。
まるで生き物がいないことが当然のような雰囲気だ。
『風の洞窟』はなんとなく神秘的なイメージのする洞窟だった。
洞窟を形成している岩は外からでもわかるくらい青く光り、岩の隙間全てからやわらかい風がふいている。
青い光は奥へ奥へと進むごとに強くなっていった。
「あれ…行き止まりだわ。」

理恵が前方を指差した。
たしかに洞窟はそこで終わっており、変わりに広い神秘的な空間があった。
「ここで終わり??風の精霊はどこにいるんだ??精霊を閉じ込めている怪物は??」
アレンがあたりをキョロキョロと見回した。
たしかに怪物がいるような気配はない。
しかし精霊の姿もなかった。
「もしかしてここ、本当は『風の洞窟』じゃないんじゃ…」
そうつぶやいたとき、
急に突風が僕達を襲った。
「ぐうっ！」
僕達は突風に吹き飛ばされ、洞窟の奥の壁に思いきりうちつけられた。
「な、なんだ…??」
僕は背中を押さえながら立ちあがった。

右手にはしっかりと剣を握り締めている。
理恵とアレンも杖をかまえて立ち上がった。
しかし怪物らしきものは何もいない。
そのかわり、入口の方から何かが飛ぶように風を切る音が聞こえた。
「来る！」
僕がそう叫んだとき、
また激しい突風が吹いて大きなワシのような青い鳥がつっこんできた。
僕達はとっさに両脇によけ、大ワシはちょうど僕達のいたところに体当たりした。
ドーンッ！
すさまじい音がして洞窟の壁がガラガラとくずれた。
大ワシが体当たりしたところは大きくえぐれ、もしよけなかったらと思うとぞっとした。
大ワシはくるりとこちらを向いた。
「星矢！多分こいつが精霊を閉じ込めている怪物よ！」
僕はごくりとつばをのんだ。

大ワシというより、怪鳥と呼んだ方がいいだろう。
怪鳥は洞窟と同じように神秘的な水色の毛をはやしていた。
しかしくちばしは異常に長く、目はキッとつりあがった真っ暗な目だ。
体長は洞窟の天井ギリギリくらいで頭の毛が少しかすっている。
怪鳥はギロッと僕達を睨むと大きな両翼を広げた。
怪鳥が翼を羽ばたかせた。
とたんに強風が僕達に襲いかかった。
僕はとっさに剣を盾にし、風を受け流した。
それでも風はよけきれず、僕は数メートル後ろに吹き飛ばされたが、さっきのように壁にうちつけられずにすんだ。
一方、理恵とアレンの2人は呪文を唱えるのが間に合わなかったらしく、さっきと同じように壁に打ちつけられていた。
「きゃ！」
「ぐぅ！」
後ろから2人のうめく声が聞こえた。

僕が振り返っている間にまた怪鳥が翼をはばたかせた。
また強風が僕らを襲い、今度は僕も吹き飛ばされ壁に背中を打ちつけられた。
「ううっ！」
怪鳥が翼を折りたたみ突進する体勢になった。
「やばい！体当たりがくる！よけるんだ！」
僕は急いで言った。
理恵とアレンは急いで横っ跳びによけた。
僕も同じように動こうと体を起こした。
しかし、立ち上がろうとしたとき、足の裏にとてつもない激痛が襲った。
「つっ！！」
僕は立ち上がれずその場に崩れおちた。
きっとさっき数メートル引きずられたときにケガしたんだ…！！
そう思っている間にも怪鳥は目前にせまっていた。
ダメだ…！

よけられない！

僕はあきらめてぎゅっと目をつぶった。

しかし、いつまでたっても痛みはこない。

どうしたんだろう？

僕はゆっくりと目を開けてみた。

怪鳥は僕のすぐ目の前で僕に体当たりしようと必死に頭をつきだしている。

しかしまるで僕の目の前にバリアができたかのように鳥は僕の目の前から進むことができずにいた。

これはもしかして…

僕は理恵の方を見た。

予想通り理恵が僕に杖を向けている。

きっとさっきの光のシールドをだしたのだ。

けどあれはあまりもたないはず…

パキッ…

そう思った瞬間に目の前の光のシールドが悲痛な音をだした。

もうすぐ破られる…！！

「風よ、運べ！ウインドゥプログレス！」

理恵が叫んだ。

突風が僕に向かって吹き、僕の体は横に吹き飛ばされた。

同時に怪鳥がシールドをやぶり、僕のいた場所に思いきり体当たりした。

「星矢！大丈きゃぁ！！」

向こう側の端から理恵の声が聞こえたと思うと、それは途中でうめき声に変わった。

「リエ！」

向こうでアレンの緊迫した声がした。

何が起こったんだ！？

理恵達の方を見てみると、怪鳥が怒り狂って長いくちばしで理恵を攻撃している。

理恵の杖は怪鳥の足元にはじきとばされ、理恵はまったくの無防備の状態になっていた。

アレンが怪鳥に向かって杖を向けた。

「炎よ、爆発せよ！ファイヤーバースト！」

アレンの杖から炎が吹き出た。

炎は怪鳥に当たり爆発したが、それはほんの小さな爆発でしかなかった。

しかし怪鳥はゆっくりとアレンの方を向いた。

アレンは蒼白し、足に根が生えたようにその場に立ち尽くした。

「アレン！」

怪鳥がアレンに向かって長いくちばしをふるおうとした。

ダメだ！

助けにいかなくちゃ…

助けにいかなくちゃ！！

そう思ったとき、剣が緑の光につつまれた。

怪鳥が驚いてこちらを見た。

なんだ…？？

これは…

そのとき急に地の精霊、ノームの言葉が頭にうかんだ。

――――お主の剣に地のエナジーをさずけた。戦いのときには地のパワーがお主を手助けしてくれるであろう。――――

まさか…

僕は無我夢中で叫んだ。

「地の魔法をこの剣に！！呪文は『地の力よ、剣に。マッドパワー』だ！」

頭の中にまったくしらない呪文がうかんでいて、僕は無意識にそれを口にしていた。

理恵が傷ついた体をなんとか動かして怪鳥の足元に落ちていた杖を握り、僕の剣に向けた。

「地の力よ…剣に…！！マッドパワー！」

しかし、理恵が呪文を唱えたのにもかかわらず杖からは何もでなかったし何もおこらなかった。

…違う。

理恵じゃ…ないんだ…！！

なぜか僕はそう思った。

怪鳥が僕にくちばしを向けた。

理恵じゃなくて…

「アレン！」

アレンは僕の剣に杖を向けた。

「地の力よ、剣に。マッドパワー！」

アレンの杖から緑の光がとびだした。

それはまっすぐに僕の剣に向かい、そして剣に宿った。

その瞬間、僕はたしかに不思議な力が流れ込んでくるのを感じた。

僕は剣を怪鳥に向けて叫んだ。

「捕獲（アイビー・キャプチャー）する蔦！！」

剣の刀身が何本もの蔦に変わり怪鳥を襲った。

蔦をあっという間に怪鳥にからみつき動きをふうじた。

怪鳥はなんとか抜け出そうと必死にもがいていたが、蔦は恐ろしく頑丈で怪鳥を逃さなかった。

蔦はそのまま剣から離れ、また銀の刀身が現れた。

僕は蔦で動けなくなっている怪鳥に向けて輝く刀身を向けた。

そしてそのまま突き刺した。

「ピィィィィィィィィ！！」

怪鳥は一声大きくいななくとボロボロと羽根が抜けていき、やがて姿を消した。

僕はへたりと尻もちをついた。

理恵はぼんやりと怪鳥が消えた場所を眺めていた。

「そ、そうだ…風の精霊は…？？」

僕はふと気が付きつぶやいた。

理恵もキョロキョロとあたりを見回した。

しかし、精霊の姿はない。

さっきの怪鳥は精霊を閉じ込めていた怪鳥じゃなかったのか？？

そう思った時、

「ここにいますよ。」

聞き覚えのある声がした。

僕と理恵は驚いて同時に声の方を見た。

「はじめまして。私が風の精霊、シルフです。」

アレンが立ち上がりにこりと僕達に笑いかけた。

その瞳は鮮やかなブルーではなく、透きとおるような白だった。

9話　風の洞窟（後書き）

表現甘くてすいません；
必殺技だしちゃいました（笑
なんかよくわかんない感じになってます＞m（__）m＜

１０話　風の精霊

「風の…精霊??アレンが…??」

理恵が驚愕しながらつぶやいた。

アレンはくすくすと笑った。

「違いますよ。私は彼の体を借りているだけ。なにしろ風とは目には見えない存在なのでね。私の姿はあなた方には認識できないのですよ。見たところ…」

シルフはくすくす笑いを止め僕と理恵を交互に見た。

「あなた達は『向こう』の世界の人間のようだ。だから同じこの世界に住む者として彼の体が一番入り込みやすかったのです。」

僕は目を見張った。

どうして僕達が違う世界からきたということをを知っているんだ??

ノームははじめ、気づいていないようだったのに…

「なぜ私がそれを知っているんだ?って顔してますね?」

僕はギクッとした。

「は、はい。まぁ…」

「風はどこにでも吹くことができます。そして私はそれを通して世界を見ることができるのですよ？…さて」

シルフは僕に向かってウインクをし、僕の手に握られた剣に視線をうつした。

「状況は分かっています。地の精霊、ノームとのやりとりもね。とすると、私はあなた達に風のエナジーを授ければよいのですね？？」

僕達はこくっとうなずいた。

「では、剣を私に。」

僕は剣をシルフに手渡した。

シルフは剣を手にとると片手を剣にかざした。

洞窟がやわらかい水色の光に包まれた。

僕はなんとなく不思議な感じがした。

今僕達の目の前に立って風のエナジーを送っているのはシルフだ。

しかしシルフの姿はアレンであり、僕にはアレンが風のエナジーを剣に送っているように見える。

あの魔法もうまく使えないアレンがこんなすごいことをしていると思うと、とてつもなく変な感じがした。

水色の光は丸い球体になり、黄金色の宝石の中に吸い込まれていっ

た。

「これでいいでしょう。」

水色の光が消えた。

シルフはたしかめるように塚を握ったり、刀身をなでたりしたあと僕に剣をかえした。

剣は前よりも一層力強くなった気がした。

「それにしても…」

僕が剣を鞘におさめるのを眺めながら、手を握ったり開いたりした。

「生身の体とはいいものですね。私には実体がないものですから…たまにこうやって人の中に入るとまた出て実体のない姿に戻るのがいやになるのです」

シルフはぎゅっと握った手の感覚を確かめるように見つめながらポツリと言った。

「いっそこのまま、私もあなた達の旅に同行でもしましょうか??」

「ダメ!」

理恵が間髪いれずに叫んだ。

僕とシルフは驚いてポカンと理恵を見た。

「そんなのダメよ！アレンを返して！」

僕はさらに驚いた。

あれ？？

理恵はアレンとケンカしてたはずなのに…

いなくなって清々するとでも言うと思ったんだけど…

シルフはにやっとあやしげに笑った。

「どうしてですか？この少年は戦力にならない足手まといでしょう？？ついまえにあなたとケンカしていたばかりではないのですか？？」

「そ、それは…で、でもダメ！アレンは私達の仲間よ！どんなに魔法がうまくなくても、仲間なのっ！」

理恵は駄々っ子のように言った。

僕は呆然とそんな理恵を眺めていた。

シルフはあっけにとられたように理恵を見て、くすくすと笑みをこぼした。

「そうですか、なかなかにおもしろい理屈ですね！大丈夫ですよ。もともとそんなつもりはありません。この少年の体はお返しします。」

理恵は安心したようにほっと息をついた。

「あなたにとってこの少年はよほど大事な人物なんですね。」

「えっ！？いや、そんなんじゃないわ！」

理恵が慌てて手を顔のまえでぶんぶんふった。

その顔が少し赤くなっているように見えたのは気のせいだろうか？？

シルフはくすくすと笑い、そして僕に視線をうつした。

「そういえば、さっきあなたは地の力を使いましたね？？」

「は、はい」

そうだ。

さっきは頭に浮かんできたのを実行して無我夢中に使ってたけど…

捕獲（アイビー・キャプチャー）する蔦って何なんだろう？？

それにどうして技の名前や使い方が分かったんだろう？？

「それは地の力を使った…うーん、奥義とでもいいましょうか。まぁ、特別な技です。それぞれのエナジーを手に入れることで、それぞれの属性の奥義が使えます。」

奥義…

必殺技みたいな感じだろう。

たしかに強力な技だった…

それぞれの属性ってことは、そんな技がまだあと5つもあるんだ。

「それじゃ…風の奥義は…」

「はい、使えますよ。奥義はそれぞれの属性にたけた者からその属性のパワーを送ってもらうことで発動します。私の見たところ…」

シルフは理恵をちらっと見た。

「そこのお嬢さんとこの少年は少々特別なようです。普通の魔法使いなら1つの属性しかきわめられないはずですが、あなた達はそれぞれ対になる3つの属性をきわめることができる」

「3つの属性…??」

シルフはこくりとうなずいた。

「あなたは風、水、闇の属性。そしてこの少年は地、火、光の属性です」

「風、水、闇…」

理恵が繰り返した。

「あなたが地属性の奥義を使えたのはこの少年が地属性にたけていたからなのです。ですので風属性の奥義を使うにはこのお嬢さんに

パワーを送ってもらうといいでしょう」

僕はこくっとうなずいた。

なるほど。

あのとき、理恵じゃなくてアレンじゃないといけない気がしたのはそのせいか。

「それでは伝えたいことも伝えられたところで…私はこの辺で去るとしましょうか」

シルフは目を閉じようとしたが、思いだしたように口を開いた。

「そうだ。最後に1つ。この少年は自分があなた達の足手まといになっていると思い悩んでいるようです。お嬢さん、さっきあなたが私に言ってあげたことと同じことをこの少年にもいってあげてください」

理恵はほんの少しだけ首を縦に動かした。

「それでは、先の冒険もがんばってください」

シルフはゆっくりと瞳を閉じた。

ふわりとした、やさしい風が吹いた気がした。

アレンが再び瞼をあけたときには、その瞳は鮮やかなブルーに戻っていた。

アレンはきょとんとしてあたりを見まわした。
「あれ??僕は今まで…あっ！風の精霊は！?」
「さっきまで今君の立っている場所にいたよ」
僕はアレンを指差して言った。
アレンは意味が分からないとでもいうように顔をしかめた。
「ねぇ…アレン…」
理恵が一歩まえに踏み出した。
「あの…昨日からひどいことといっぱい言ってごめんなさい！」
理恵はぺこりと深く頭を下げた。
アレンは驚いたように理恵を見て、そして頭をかいた。
「えっと…うん。いいよ。僕も…ゴメン」
理恵はにこっと笑ってうなずいた。
僕はそんな2人の様子を見て安心していた。
良かった。
やっと2人が仲直りしてくれた。

明日からはもう気まずい思いをしなくていいんだ！

僕が喜びに浸っているとき理恵が慌てたように言った。

「あと！それとね？アレンは足手まといなんかじゃないから！」

アレンは目を見張ったがにっこりと理恵に笑いかけた。

多分なぜいきなりそんなことを言われるのか疑問に思っているはずだ。

だけどアレンはそんなことは一言も口にださなかった。

「うん！知ってるよ！」

そう答えたアレンの表情は肩の重荷がとれたようなやわらかい笑顔に包まれていた。

11話　捕縛の芝生

僕達は『風の洞窟』の出口に向かって足を進めていた。

「へぇー。僕に風の精霊が…」

アレンは自分の手をまじまじと眺めた。

「おっどろいたなぁ。全然そんなの感じなかったよ！」

アレンはそう言うと杖を軽く上にかかげた。

「僕が特別…僕はえっと…地と火と、あとは…えーと…」

「光だよ」

「そうだ。光だ。その力を君の剣に送ることで必殺技が使えるんだね！」

さっきアレンにシルフが話したことを話してからずっとこうだ。

自分が人より少し特別ということが相当うれしいらしい。

まったく…

理恵はそのことについて何も言ってないのに…

僕は軽くため息をついた。

「ねぇ、星矢。次に行くところはどこだっけ??」
理恵がさっさと次の場所に進みたいとばかりに足取りをはやめながら言った。
「えっと…次の場所は…」
僕はノームからもらった地図を広げた。
『風の洞窟』の南の方に『海の神殿』という太字があり、そこに赤い×印があった。
「『海の神殿』だ」
「ふーん。なんかドキドキしそうな名前ねっ!」
理恵はにこっとうれしそうに笑った。
なんでうれしそうなんだろう…??
僕は名前を見ただけで恐ろしい予感がするんだけど…
軽く疑問に思いながら地図を見ていると『風の洞窟』と『海の神殿』の間に何か小さな文字があるのが分かった。
「これは…」
僕はじっと目をこらしてその文字を見てみた。
「『商人の町』…??」

「『商人の町』！？」

僕がつぶやくとアレンがすばやく反応した。

「う、うん。『風の洞窟』から『海の神殿』に向かう途中に『商人の町』っていうのがあるんだ」

僕は地図を理恵とアレンの2人に見せながら指差した。

「ほんとだ…うーん。弱ったなぁ…」

「なんで？？何かいけないことでもあるの？？」

アレンは考え込むようにもう一度地図を見た。

「『商人の町』っていうのはその名のとおり商人達が集まってつくりあげた町なんだ」

「へぇ…ほんとに名前のまんまね」

理恵が軽く肩をすくめた。

「で、それのどこが『弱ったなぁ』なの？？」

「『商人の町』は商人達が集まっている町でいろいろな店があるんだ。そして、一度町に入ったら町の中の店で何かを1つでも買わなければいけない」

いろいろな店か…

異世界の店ってどんなのがあるんだろう??
僕は『商人の町』を想像しながら笑みをこぼした。
「セイヤ、笑いごとじゃないんだよ」
アレンはそんな僕を見て何を勘違いしたのか、少しむっとしながら言った。
「もし『商人の町』で何も買わなければ二度と町をでられないようになるらしいんだ」
アレンがいかにも恐ろしげな表情で言ったので僕はぎくりとした。
しかし理恵は事も無げにもっともなことを言った。
「そんなの、何か買えばいいだけじゃない」
そ、そうだ。
そんなに怖がらなくても…
何か買えばいいだけじゃないか!
なんだ、少し焦った僕がバカみたいだ…
しかしアレンはまるで何も分かってないとでもいうようにぶんぶんと首をふった。

「…君達はまだ分からないのかい??何か買えるだけのお金を持っているのなら僕はこんなこと言ってないよ。」

「えっ??どういうこと??」

理恵が首をかしげた。

「だから…」

アレンは巾着袋の中から小さな皮の財布をとりだした。

「僕の持っている全財産ではとてもじゃないけど『商人の町』の品物は買えないんだよ!」

僕達は一瞬呆然とした。

そして同時に笑い声をあげた。

「そ、そんなに真剣にならなくても!!」

「そうだよ!大体なんでものを買わなかっただけでひどい目にあわされないといけないんだ??」

僕と理恵は笑いながらアレンを見た。

アレンは少し赤くなってうつむいた。

「で、でも…たしかに父さんがそう言ってたんだ!」

理恵はポンッとアレンの肩に手をおいた。

「うんうん、分かった。でも大丈夫よ！いろいろな店があるんだったらすごく安い品物もあるはずだって！」

「そうかなぁ…？？」

なんとかアレンを納得させ、そして洞窟の出口にたどりついた僕達はさっきのぼってきた崖を見降ろした。

「さぁ、どうやってここを降りる？？」

相変わらず崖にはビュンビュンと強い風が吹いている。

降りることは簡単そうだが、この風の中無事に降りられるとは思わない。

「簡単よ、また私がシールドをかければいいだけよ」

理恵が自信たっぷりに言った。

「君のシールドは途中できれるじゃないか。さっきみたいにひどい目に合うのは僕はゴメンだよ」

アレンは肩をすくめた。

「それならあなたがやれば！？あなたは光属性の魔法が得意なんでしょ！？」

「な、なんだよ！？僕ができないの知ってるんだろ！？」

せっかく仲直りしたばかりなのにまた口ゲンカになってしまったようだ。

僕はあきれてため息をついた。

「やめなよ。２人とも。…あの風が止めば楽におりられると思うんだけど…」

そうつぶやいたとき、

「私が止めましょう」

後ろで声がした。

びっくりして振り返るとアレンの瞳がまた透きとおるような白になっていた。

シルフだ。

「シルフ??『風の洞窟』をでても大丈夫なの??」

理恵があっけにとられながら言った。

「私はどこにでもいますよ。私はいつでも風の中にいるのです」

シルフはくすくすと笑った。

そして崖を見降ろしぶつぶつと何かをつぶやいた。

風の唸り声が止まった。

「これで大丈夫です」

「あ、その…ありがとうございます」

僕がかるく頭をさげるとシルフはおかしそうに笑った。

「私に敬語が不要です。なんだかおかしな気がしますからね。では、また」

ふわりとした風が頬をなでた。

「あれ？僕…」

「シルフよ」

理恵が面倒くさそうに言った。

「えー！？また！？なんで僕ばっかり…」

「君が1人だけ異世界人だからだよ。それよりもはやく箒をだしてくれないかな？？」

「えっ？？風は？？」

「止んだよ！！」

僕は何も分かっていないアレンにイライラと言った。

アレンは少しむっとしながらも箒をとりだした。

なんとなくシルフはまたくる気がする…
シルフが来るたびにこんな感じになるのかな…？？
そう思うと深いため息がでた。
僕達は箒にまたがると一気に急降下し、下におりた。
風が吹いていないと驚くほど簡単に降りることができた。
僕達は地面に降り立つとまっすぐ南に向かって歩きだした。
のんびりと歩いているうちに、まるで友達とピクニックにきている
ような感覚がした。
それほどまでにこの世界は平和に見えた。
あたりには草花が咲き乱れ、ハチや蝶が忙しく花の道を集めている。
小鳥達は楽しそうに歌を歌い、自由気ままに飛びまわっていた。
「なんだか…のどかねぇ…」
理恵が大きくのびをした。
「うん。僕、ここで寝転んで日向ぼっこしたい気分だ」
アレンはぽかぽかと日光があたっている芝生を見ながら言った。

僕もなんだかふわふわとした気分になりその場でのんびりと寝転がりたいという気分にかられた。

「ちょっとここで一休みする??」

2人はこくっとうなずいた。

僕達は近くの芝生に大の字になった。

太陽の光がぽかぽかと気持ちいい。

ずっとこのままこうしていたいという気分になった。

そして僕はいつのまにか眠りについていた…

僕は水であふれかえっている建物の中――きっと『海の神殿』だ――にいた。

急に大きな魚が僕に襲いかかってきた。

僕は慌ててその魚を倒そうと地属性の必殺技を使おうとした。

しかし必殺技はなぜか僕の方に向かってきた。

僕は逃げ出そうとしたが、手が剣を離そうとせず僕は太いつたに縛りあげられた。

動けない！

そのとき、自分の技に縛りあげられた僕に向かって大きな魚が襲ってきた。

やられる…！！

パチッ！

僕は勢いよく目をあけた。

なんだ…

夢か…

僕は安心してほっと息をついた。

ふと空を見ると真っ暗な闇の中に満天の星がちりばめられていた。

もう…夜か…

僕はどれくらい眠っていたのだろう??

多分今は真夜中ぐらいの時間だと思う。

風の神殿をでたときにはたしか正午くらいだったかな??

まぁどちらにしても最低6，7時間は眠りこんでしまったらしい。

こんなところで眠ってしまうなんて…

けれど、とりあえず疲れはとれたようだ。
はやく2人をおこして先に進もう。
そう思い僕は立ち上がろうとした。
しかし、なぜか手が動かない。
えっ??
僕は更に強く動かそうとしてみた。
しかし手は何かにしばられたように動かない。
どうしてだ…??
そう思ったとき、僕はふとあることに気がついた。
手が動かないだけじゃない、首から下が全部うごかないんだ!
僕は驚いて自分の体を見降ろした。
僕の体は草に縛りつけられ、地面にはりつけにされていた。
な、なんだ!?これ!?
あたりから何かの動物のうなり声が聞こえた。
はっとしてあたりを見回すとたくさんの獣達が僕達を狙い、今にも

襲いかかろうとしていた。

そうか…！！

ここはきっとあの動物のえさ場なんだ…

気持ちよさそうな芝生に獲物を誘いこみ、眠ったところを縛りあげてとっておくんだ…

僕の隣には理恵とアレンが気持ちよさそうに眠っていた。

はやく2人を起こして逃げないと！

僕は大声をだそうとしたが、獣達はちょっとした拍子で僕達に襲いかかってきそうな様子だった。

どうする…？？

どうやって逃げだせばいいんだ！？

「きゃぁ！！！！！」

ふいに隣で理恵の叫び声が聞こえた。

理恵が目を覚ましたようだ。

はやくも今の状況を把握したらしい。

その拍子に獣達が一斉に襲い掛かってきた。

ダメだ…！！
僕はあきらめて固く目をつぶった。
ブシュッ！
何かがいきおいよく噴き出す音がした。
ああ…
きっと僕の血だ…
痛みがないってことは…
僕もう死んだのかな??
理恵とアレンも??
2人も今僕の近くにいるのかな??
僕は2人を探そうと体をおこそうとした。
しかし体は動かない。
あれ??
僕、もう死んだのなら草の束縛もとけているはずなんだけど…
…ということは…

僕、死んでない??

僕はゆっくりと目をあけてみた。

「大丈夫か??」

顔に大きな切り傷のある男の人が僕を見降ろしていた。

１２話　檻の中

男は僕達を縛り付けている草をナイフで切り裂いていった。

僕はのびをして体の自由を確認し、軽く頭をさげた。

「あの…ありがとうございますっ！」

男は返事もかえさずに僕達をじろじろと見てにんまりと笑った。

「どうやらケガはないようだな」

男がふところから杖をとりだした。

何をする気だろう??

男が僕らに杖を向けた。

「地よ、かの者を捕らえよ！マッドアレスト」

えっ！?

僕達が驚く間もなく地面の土がせりあがってきて僕達の手足に巻き付いた。

「固まれ！」

男が更に杖を向けて言うと土は乾かした泥のように固くなり、僕達はますます動けなくなった。

「な、何するのよ！？」
理恵が大声でわめいた。
男の後ろから数人の集団が現れた。
「おまえら！いい商品が手に入ったぜ！はやく連れて行け！」
男の声とともに数人の集団が一斉に僕達に向かってきた。
「きゃっ！！」
「うわぁ！！」
隣で理恵とアレンの叫び声が聞こえた。
「理恵！アレン！」
体が宙に浮いた。
びっくりしてどうなったのか確認してみると僕は大柄な男の肩にかつがれていた。
隣を見ると理恵とアレンも同じように男の肩にかつがれている。
僕達は大きな檻を積んでいる車――いや、どちらかというとトラックだ――まで連れていかれ、そこに乱暴に投げ出された。
「っつ！」

背中に鈍い痛みが襲った。

ガシャン！

大きな音がして檻の扉が閉められ鍵をかけられた。

男達は僕達をあざけりながらトラックにのりこんでいった。

ブォォォン！

エンジンがかかる音がしたと思うと、トラックが動き出した。

「理恵！アレン！大丈夫！？」

僕はおちついてから2人に呼びかけた。

「大丈夫よ！」

「僕も！」

2人の返事が帰ってきた。

「けど…全然うごけない。起き上がることもできないわ！」

僕達3人は檻の中に転がされたまま、起き上がることもできなかった。

理恵が近くでまるで芋虫のように体を動かしているのが見えた。

「僕達…きっとどこかに売り飛ばされるんだ…」

アレンがぽつりと言った。

そういえば、さっき男は僕達を見ていい商品が手に入ったとか言っていた気がする。

ということは…

僕はぞっとした。

僕は僕を買った家で一生働かされる。

それはもう、ひどいあつかいで。

背中の剣もどこかに売り飛ばされるんだろう。

せっかく2つのエナジーを手に入れたのに…

もう僕達の旅も終わりなんだ！

「こんばんは。旅は順調ですか？？」

後ろからバカ丁寧なアレンの声がした。

このしゃべり方は…！！

「「シルフ！？」」

僕と理恵は同時に言った。

「ええ、私ですよ。…っと、どうしたんですか？この状況は」
シルフは窮屈そうに体をくねらせた。
助かった…！！
シルフならきっとこの状況をなんとかしてくれるに違いない！
「シルフ！見てただろ！？僕達、捕まったんだ！ここからだしてくれ！」
シルフは苦笑した。
「ムリですよ」
「なんで！？あなたは風の精霊なんでしょ！？」
シルフはゆっくりと首をふった。
「たしかにそうですが…この檻には強力な魔法反射呪文がかけられているようだ。もし私が風の力を使えば逆に私達がぼろぼろになってしまいます」
「魔法反射呪文ですって…！？」
理恵が目を見開いた。
「あの呪文はすごく高度な呪文なのよ！？それが使えるなんて…！！」

「まぁ、大人ですからね」

シルフはあっさりと言った。

「一応勘違いしないでくださいよ？私は人間ごときがかけた魔法反射呪文をやぶれないわけではありません。しかしこの少年の属性が私に合わないのでね」

「それじゃぁ私の体を使って！」

理恵が言った。

「あなたの体ですか…？？はて、うまくはいることができるかわかりませんが…やってみましょう」

ふわりとやさしい風が檻の中を駆け巡った。

アレンの瞳が鮮やかなブルーに戻り、かわりに理恵の明るい茶の瞳が透きとおるような白に変わった。

「ほう、うまくはいれたようですね」

シルフは驚いたように言った。

アレンは目をぱちくりとさせ理恵を見た。

「リエ…？？なんだかいつもと違う気が…」

「シルフが理恵の中に入ったんだ」

シルフはなんとか動く頭を軽くさげた。

「はじめまして。風の精霊、シルフです」

「あー！あなたがいつも僕に取りついていたのか！」

アレンが大声で叫んだ。

「アレン、大声をだしたら奴らに気づかれる」

僕は静かにアレンをたしなめた。

「そうですよ。大体取りつくとはなんですか！私はあなたの体をお借りしていただけですよ！まったく…不愉快だ！」

シルフが顔をしかめて怒りを表しているのを見てアレンは慌てて頭をさげた。

「す、すいません」

「わかればいいのです。さて、」

シルフはまだ怒っているようだったが気を取り直したように言った。

「なるほど、さすが風の属性を得意とするものだ。この体なら大丈夫そうです。さっそくやってみましょう」

シルフは目を閉じ、歌うようにつぶやいた。

「風よ。我が兄弟よ。私に力を貸してください…」

ヒュルルル…

風が頬をなで、シルフのまわりに集まった。

「す、すごい…」

アレンがその様子を見て呆然とつぶやいた。

僕も驚きで目を見張っていた。

風がどんどんとシルフのまわりに集まり、小さな渦のようなものができている。

やはり、さすが風の精霊だ。

なんとなく今までは軽く見ていたが僕はあらためて精霊の力を思い知った気がした。

「さぁ、我が兄弟達よ。私達の呪縛を解き、この檻から私達を解放するのです！」

ビュン！

とたんに風が唸り声をあげ、僕達のそばをとおりすぎた。

バラバラ！

僕達を縛っていた泥が音を立てて消え去った。

檻はズドンッ！と大きな音を立てて一部が破壊され、僕達が出られるほどの穴ができた。

「やった！ありがとう、シルフ！」

僕は自由になった体を起こし立ち上がった。

「ええ、それでは僕はもうでます。この体はひどく居心地が悪いですからね」

シルフはさっさとそういうと目をつぶった。

ふわりとした風がふきぬけ、理恵の瞳が明るい茶に戻った。

「あら？？私…」

理恵は軽く頭を押さえて、そして自分の体が自由になっていることに驚き目を見張った。

「体が動く！しかも檻に穴があいているわ！やった！シルフがやってくれたのね！？」

僕はうなずいた。

「びっくりしたよ。僕、シルフって初めて見た。…見たっていうか、外見はまったく君のものだったんだけどね」

「そりゃそうよ！あなたのときも同じ！さぁ、はやく逃げだしましょう！」

僕達は急いでトラックから飛び降り、地面に足をついた。
トラックがやっと異変に気がついたように止まり、男達が逃げていく僕達に視線を向けた。
「大変だ！商品が逃げだぞ！捕まえろ！」
叫び声とともに数人の男達がトラックからおりて僕達をおいかけてきた。
「どうしよう！追ってくる！」
「はやく！走るのよ！」
理恵が杖をぬき、追ってくる男達に向けた。
「風よ、妨害せよ！ウインドゥディスターブ！」
強風が男達に向かって吹き、前列にいた男達を転ばせた。
「しばらく足止めになるはずよ！さぁ、はやく！」
僕達は全速力で走った。
前方に家の明かりが見えた。
町だ！
「町がある！あそこに逃げ込もう！」

僕達はあえぎながらも町に向かって走った。

なんとか町の入口を通った僕達は目を見張った。

町の中では更にたくさんの人間達が待ち伏せしていたのだ。

後ろから男達が近づいてくる音が聞こえた。

挟まれた…！！

「いけ！捕まえろ！」

分かった…

ここが『商人の町』なんだ…

考えている間に僕はたくさんの人におさえつけられ、手足を縛られた。

急に視界が真っ暗になった。

１２話　檻の中（後書き）

シルフさんでてきすぎですよね；
でもこれからもよくでてくると思います！

13話　商人の町

僕は真っ暗な闇の中、冷たい石の上に倒れていた。

どうやら目隠しされて口を何かでふさがれているらしい。

話すこともできなければまわりの様子をうかがうこともできないのだ。

しかし、横でかすかに聞こえる息づかいから理恵とアレンも同じようにされていることが分かった。

良かった…

2人とも無事だ…

それにしても、僕達はいったいどこに連れていかれるんだろう??

僕達はこのままどこかに売られてしまうのか??

もう一度シルフが来てくれたらいいのに…

いや、もしかするとしゃべれないだけで本当は今アレンはシルフなんじゃないか!?

さっきも助けてくれたんだ!

きっと今度も助けてくれるさ!

僕は期待を持って風が頬をなでるのを待った。
しかし風の気配はまったく感じられない。
感じるのは頬にあたる石の冷たさだけだ。
やっぱり…
僕達はこのまま…
ガチャ！
そのとき、何かの鍵があく音がした。
ガヤガヤとした人の声が聞こえ、足を縛っていた紐がはずされたと思うと僕は無理やり立ちあがらされた。
「おら！さっさと歩きな！」
僕は背中をどんっと押され、よろけながらも前に向かって歩いた。
目隠しされているのでどこに向かって歩いているのか分からない。
隣でドンッ！と何かが壁にぶつかった大きな音がした。
ガハハハハハッ！
男達が大きな声で笑った。
「何止まってんだよ！？さっさと歩け！」

一瞬立ち止まった僕は背中を思いっきり押されてまた歩かされた。
男達に誘導されてなんとか部屋をでると足元にでっぱりがあった。
どうやら階段のようだ。
僕は慎重に足で階段の位置をたしかめながらのぼった。
もしつまずいてあんな風に笑われるのはゴメンだ。
しばらく歩かされているうちに、僕達はいつの間にか外にでていることがわかった。
大きな耳をつんざくような大きな歓声が僕達のまわりで巻き起こっていた。
僕達は短い階段をのぼらされ、やっと目隠しをとりはらわれた。
目にとびこんできた光が眩しい。
しばらくはまともに目を開けることすらできなかったが、なんとか目が慣れてきてまわりの様子が確認できた。
僕らは町の真ん中の大きな台座の上に立たされていた。
台のぎりぎりまで人が詰め寄り僕達をよく見ようと目をこらしている。
隣では理恵とアレンがおびえたようにその様子を眺めていた。

「さぁ！おまちかねのオークションの時間だよ！」

やせたヒョロヒョロとした男が大声で叫んだ。

「みなさん運が良い！今日は大目玉商品！生きの良い3人の子供だ！」

観衆が更に歓声をあげた。

僕達は目を見合わせた。

どうしよう…

このままじゃ…

大変なことになる！！

「さらに！2本の杖とこの立派な大剣もおまけだ！」

僕は驚いて男が示した方を見た。

そこには僕が持っていた黄金色の宝石をつけた大きな剣がある。

あれは…ダメだ！

なんとかして取り返さなければ！

けど今ここで動いては騒ぎになり、またとらえられるに決まっている。

剣さえ手に入れればなんとかなるかもしれない…

ついでに理恵とアレンの杖も…

「じゃぁ最初はこの茶髪の美人のお譲ちゃんだよ！」

理恵がまえに押し出された。

理恵は抵抗することなく前に進み出た。

理恵はもう諦めてしまったのだろうか？？

「さぁ！はじめは１０，０００ゴールドからだ！」

男の叫び声と共に観衆達が次々に叫びだした。

「１５，０００！」

「２０，０００！」

「２５，０００！」

「おぉっと！２５，０００だ！さぁどうなる！？」

僕はその様子をビクビクしながら見ていた。

この人達は僕達を買うために大金をつぎ込もうとしているんだ。

僕達は本当に商品でしかない、これは僕達のオークションなんだ！！

あらためて確信すると恐怖が大きくなっていった。

理恵が終わったら…

次は僕??

観衆達が僕を手に入れようとお金を出し合うのか…??

僕は思わず身震いした。

「３００，０００ゴールド！さぁ！次はいないか！？…いないようだ！ではこのお嬢さんはそこのダンディなお兄さんに決まりだ！」

パチパチと大きな拍手があがり、悔しがる声が聞こえた。

そして、観衆の中から1人の太った男が台座の上にあがってきた。

男は理恵を見てにんまり笑うと司会の男に金貨のはいった大きな袋を差し出した。

男はそれをはかりにかけ重さを確認した。

「っと…よし、きっかり３００，０００ゴールドだ！それじゃご両人！連れていってくれて結構ですよ！」

男は理恵を縛っていたロープをはずすと理恵の背中を押して降りるようにうながした。

そのとき…

ドカッ！

「ぐぅ！」

理恵が太った男の腹に思いっきり蹴りをくらわした。

男はうめき声をあげてよろめき、司会の男と僕達は呆然とその様子を見ていた。

理恵はそのすきに大剣の隣に飾られていた自分の杖をとりあげると僕とアレンに向かって杖を向けた。

「風よ、切り刻め！ウインドゥカット！」

僕達をしばっていたロープが風にズタズタにひかさかれ、僕達の体は自由になった。

そこでやっと司会の男が現状に気が付き声をはりあげた。

「小僧達が逃げるぞ！捕まえろ！」

しかし僕は男達がかけつけてくるまえにすばやく剣をつかんだ。

どうやらアレンも無事に自分の杖をつかんだようだ。

「はやく！逃げましょう！」

理恵の声とともに僕達は急いで台座をかけおり、おしよせてくる観衆をかきわけてまえに進んだ。

観衆達はワーワーと騒ぎどよめきだした。

「よし！人の波にまぎれて隠れてしまおう！」

僕達はざわめく観衆の中を身を低くして進んでいった。

どうやら男達は観衆に邪魔されて僕達を見失ったようだ。

観衆の波からでると僕達は急いで町の反対側の門に向かって走った。

「しまった！門には看守がいる！」

町の人間は僕達のオークションに集まりほとんどいなかったが、町を出る大きな門のまえには2人の看守がいた。

看守は僕達を見ると慌てて杖をかまえだした。

「アレン！シールドよ！」

理恵が叫び、アレンが慌てて杖をふった。

「光よ、我を守れ！ライトプロテクト！」

眩いやさしい光が僕達をつつんだ。

それと同時に看守がはなった魔法がとんできた。

しかし魔法は光のシールドにふれると吸い込まれるように消えていった。

「せ、成功だ！」

「あたりまえよ！あなたは光属性が得意のはずなんだから！」

理恵がイライラと叫んだ。

「闇よ、眠りに誘え！ダークスリープ！」

理恵が看守に杖を向けて言った。

看守の１人が魔法にあたり、看守はぐらりとバランスを崩してその場に座り眠り込んだ。

看守のもう１人が杖をこちらに向けた。

「地よ、妨害せよ！マッドディスターブ！」

僕達の足元の土がせりあがり、大きな壁ができた。

僕は思いっきりその壁にぶつかり顔面を打った。

「っつ！」

理恵が壁に杖を向けた。

「風よ、吹き飛ばせ！ウインドゥディスペル！」

土の壁が大きな音を立ててふきとび、看守にあたった。

看守は土の壁の下敷きになり動けなくなった。

「今のうちよ！」

理恵は土の壁を看守のことも気にせずに踏みつけると門の方にかけていった。

僕は下敷きにされた看守に悪いと思いながらも土の壁を踏みつけて門の方に走った。

「鍵がかかってる！」

門には大きな鍵がとりつけられていて、僕達の力ではびくともしなかった。

理恵は門に杖を向けた。

「風よ、吹き飛ばせ！ウインドゥディスペル！」

門は大きな音を立てて吹き飛んだ。

「さぁ、逃げましょう！」

「リエ…君ってホントすごいよ」

僕達は理恵の魔法のすさまじさに驚愕しながらも急いで町をでた。

全速力で走り、なんとか町まで遠く離れてから僕達は足をとめた。

「はぁ…はぁ…やっと…逃げれた…」

アレンがあえぎながら座り込んだ。

「ほんと…疲れたよ…」

僕もアレンの横にどかっと座り込んだ。

全速力で走りすぎて肺がつぶれそうだ。

けどそれよりも、やっと『商人の町』から逃げきれた喜びの方が大きかった。

理恵もへたりと僕の横に座り込んだ。

「今日は…ここで休みましょう…」

理恵はそういうとキョロキョロとあたりを見回し、安全かどうかを確認してその場に横になった。

「ここなら安全そうよ。きっと大丈夫…」

そう言うとすやすやと眠りこんでしまった。

僕達は顔を見合わせにこっと笑った。

「まぁ、理恵が一番がんばってたもんね」

「うん…理恵がいなかったら僕ら、逃げきれなかったよ」

本当に…

逃げきれたのは理恵のおかげだ。

僕は理恵の隣に横になった。

やっぱり理恵は頼りになる。

そうあらためて核心しながら、僕は眠りについた。

１４話　扉の彫刻

翌朝、目を覚ました僕達はすぐに南に向かって歩きだした。

たしかに昨日『商人の町』からは遠く離れたが、もしかしたらまだ追ってが追ってくるかもしれないと思ったのだ。

しばらく歩いているうちにかすかに潮の香りが漂ってきた。

「あれ??このにおい…近くに海があるかもしれないわ」

理恵が鼻をくんくんさせながら言った。

「海??ってことは…『海の神殿』はもう近くなってるってことかな??」

アレンが少し身を震わせた。

『海の神殿』が近い。

それだけで、僕達の足取りは少し重くなった。

かろやかなのは理恵だけだ。

また『禁断の森』や『風の洞窟』のような危険にさらされる。

それでも僕達はいかなければいけない。

僕は嫌がる足を無理やり動かして前に進んだ。

僕達の予想通り、さらに歩いていくうちに青く光る海が見えてきた。

「わー！きれい！」

理恵が目を輝かせて海を眺めた。

「ほんとだ…僕、海って初めて見たよ！」

アレンも物珍しそうに海を見た。

「えっ??アレンは海を見たことがないのかい??」

「うん…僕の家って森の中にあるからさ、こんなとこまできたことがないんだ」

アレンは頭をかきながら苦笑した。

「そうなんだ…」

「2人ともー！はやくきなさいよ！！」

僕達が話している間に理恵は海の方へ走って行っていた。

「リエ！？いつの間に！？」

そう言ってアレンは理恵を追って海の方へ走りだした。

昨日走ったばっかりだっていうのに…

2人ともよくそんな体力あるなぁ…

そう思いながら僕は早足で2人の後を追った。

「で、『海の神殿』ってどこにあるの??」

あっという間に浜辺についた理恵は気持ちよさそうに風に髪をなびかせながら言った。

僕はあたりをキョロキョロと見回してみた。

「うーん…それらしい建物はないけど…」

「海の中にあるのかもしれませんよ??」

「海の中…??うーん…って!」

僕は慌ててアレンを見た。

白い瞳が楽しげに海を見つめていた。

「シルフ!昨日は大変だったんだよ!?どうしてきてくれなかったんだい??」

シルフはきょとんと僕を見た。

「どうしてといわれましても…昨日は洞窟の中で風とたわむれていたものでね。君達のところに行く暇はなかったのですよ」

「そうなんだ…」

僕はガクッと肩をおとした。

どうやらシルフは自由気ままな精霊らしい。

たしかに力にはなってくれるが、危険なときにいつもきてくれるとはかぎらないのだ。

けど、もし『海の神殿』の怪物と戦っているときにきてくれたら大きな力になってくれる…

「ちなみに私は他の精霊の聖域には入れませんからね。魔物退治は自分達の力で頑張ってください」

シルフがまるで僕の心を読んだかのように言った。

「えっ!?そうなの!?というか、『禁断の森』や『風の洞窟』って聖域だったの!?」

「そうですよ??エキドナの怪物がはこびっているだけで本当は聖域なのです。証拠に聖域の中で他の生き物を見たことがありますか??」

僕は首を軽く横にふった。

たしかに…

『禁断の森』でも『風の洞窟』でも生き物の気配を感じたことはない。

あれは怪物のせいじゃなくて、単にその2つの場所が聖域だったからなのか…

「海といえば水の精霊ですね。うーん…たしかウンディーネの聖域は海の中にあると聞いたことがあります」

「海の中？？海の中って…どうやっていけばいいんだい？？」

「何言ってるんだ？セイヤ。そんなの僕が知るわけないじゃないか」

シルフは怪訝そうに言った。…って、

僕はシルフの方を見た。

ブルーの瞳が怪訝そうに僕を見ている。

…本当に、風の精霊というのは自由気ままらしい。

僕にはあまり好きになれそうにない。

「えっと…いや、思わず独り言を口にだしてしまったというか…」

アレンについさっきまでシルフが憑いていたというのは面倒くさかったので適当にごまかしておいた。

アレンは妙に納得したようだ。

「ふーん。君ってたまにどこかぬけてるよね」

正直アレンに言われたくない。

けど僕は苦笑いで済ませておいた。

「で、『海の神殿』なんだけど僕は海の中にあると思うんだ」

「海の中??どうやっていくのよ??」

理恵がいきなり会話にわりこんできた。

「うーん…それがわからないんだよ…どうやっていけばいいんだか…」

「とりあえず潜って見る??」

理恵がいとも簡単そうに言った。

「いやいや、潜るってそんな簡単には…ほら、僕息続かないよ」

僕が否定するとアレンもうんうん、とうなずいた。

「じゃぁこうすればいいじゃない!」

理恵は杖を僕達に向けた。

「水よ、気泡を生み出せ。ウォーターバブル」

パシャッ…

水が僕達の体を包んだ。

「それで息が続くと思うわ。さぁ、行きましょう！」
理恵は勢いよく水の中に飛び込んだ。
僕達も慌ててそのあとについていった。
バシャンッ！
僕達の体重に水が勢いよく跳ねる。
しかし僕達はまったく水にはぬれなかった。
服もぬれることなく乾ききっている。
「理恵？？どんな魔法をかけたんだ？？」
理恵はにこっと僕に笑いかけた。
「今私達は泡の中にいるの。泡は空気の塊だし、水が中にはいってくることもないわ！」
「へぇー、すごいなぁ！」
アレンは関心したように目を見張った。
「そう？？まぁね！」
理恵はうれしそうにほほえんだ。
「あっ！もしかしてあれじゃないかな！？」

目の前に美しいガラスでできたような神殿が見えた。
うん…
間違いなくあれが『海の神殿』だ！
「そうだ！きっとあれが『海の神殿』だよ！」
僕達は『海の神殿』に下り立った。
神殿の扉は堅く閉ざされている。
押しても引いても開くことはなかった。
「私がやってみるわ」
理恵は扉に杖を向けた。
「風よ、吹き飛ばせ！ウインドゥディスペル！」
しかし、風はおこらなかった。
扉は平然とそこにたたずんでいる。
「あれ？？おかしいな…」
「水の中だから風はおきないんじゃないかい？？」
そのとき、扉から深く唸るような声がした。

≪汝ら、扉の先を望むか??≫

「何!?この声!?」

理恵は驚愕してあたりをきょろきょろと見回した。

「きっと…あの象が話しているんだ」

僕は扉の上に施された女性の顔の彫刻を見た。

≪汝ら、扉の先を望むか??≫

彫刻がもう一度言った。

僕は首を縦にふった。

≪ならば、我に一本の杖をおさめよ≫

ゴゴゴ…

大きな音とともに、扉の横から大きな手が現れた。

「ここに杖をおけばいいの??けど…誰の杖??」

「僕がおくよ。君の魔法は絶対に必要だからね」

アレンは杖をぬくと台座においた。

「これで通っていいだろ??」

アレンが彫刻に問いかけた。

しかし、彫刻は巨大な頭を横にふった。

≪汝の杖ではない…より強力な魔術師の杖をおさめよ≫

「なんだそれ！？」

僕は思わず叫んだ。

それって理恵の杖をおいていけっていうことか？

僕達には理恵の魔法が頼りなのに…

そんなことすればこの先に現れるだろう怪物を倒すことなんてできない！

僕はバカバカしいと思いながら理恵を見た。

理恵もきっとそう思っているだろう。

きっとこの彫刻の言うことを聞く以外にも神殿の中に入る方法はある。

その方法でいった方がいいに決まってる。

しかし、理恵の考えは違っていたようだ。

理恵は黙って杖を台座の上におき、変わりにアレンの杖をとりアレ

ンに手渡した。

「え…？？リエ…？？」

「私の杖をおけばいいんでしょ？？さぁ、おいたわよ！通しなさい！」

≪…承知した≫

扉が大きな音を立てて開いた。

「理恵！どうして！？」

「仕方ないでしょ！？私の杖じゃないとここは通れなかったんだから！」

僕の問いかけに理恵は怒ったように答えた。

「リエ、僕の杖を使うかい？？」

アレンがためらいがちに理恵に自分の杖を差し出した。

しかし理恵はそれをきっぱりと断った。

「いいわ。きっと私は魔法をつかっちゃいけないってことだと思う。あなた達だけで戦えってことなのよ！」

理恵はすねたように言うとそこに座り込んだ。

「けど私、足手まといになるのは嫌だわ。だから今回はここで待っ

てる。私は戦いには参加しない」

「理恵…」

僕は理恵にどんな言葉をかけたらいいのか分からなかった。

はたから見ればこれは自分勝手な行為かもしれない。

普通誰も戦いなどに参加したくない。

しかし、理恵にとっては違う。

理恵は自分だけ安全な場所にいて仲間を危険にさらすようなまねはできない。

だから一緒に行きたいにきまっている。

一緒に危険なところで戦いたいと思っているに決まっている。

だけど魔法が使えなくなった自分がいくと余計に僕達が危険にさらされると知っているのだ。

だからこうして我慢して…

アレンがそんな理恵をじっと見つめながらふいに口を開いた。

「リエ、大丈夫だよ。僕は君みたいにうまく魔法が使えないけど、なんとか頑張ってみせる」

「ええ、頑張って」

理恵はそっけなく答えた。

「けど、僕はどんな呪文を使ったらいいのか分からない。だからできたら君も一緒にきてアドバイスして欲しいんだけど…」

理恵は苦笑した。

「アドバイス??嫌よ。私、魔法が使えないってことは自分の身も守れないってことなのよ?そんな危険な所にそんなことのために飛び込むなんて嫌」

「大丈夫」

「何がよ!?」

理恵がイライラしたようにアレンを見上げた。

アレンはそんな理恵を見てにっこりとほほえんだ。

「僕が君を守るよ」

理恵は驚いたように目を見張った。

僕もびっくりしてアレンを見た。

「だから一緒についてきて?」

アレンは僕達の様子に気が付いていないようでまったく平然と言った。

「わ…わかったわ…」

理恵は顔をそむけながら言った。

その顔はかすかに朱色に染まっている。

「よし！じゃぁ行こう！」

アレンは意気揚揚と神殿の中に入っていった。

理恵もうつむいたままアレンについていった。

僕も慌てて2人の後を追い、理恵をぬかしてアレンの隣に並んだ。

「ねぇアレン…あれってどういう意味…？？」

僕は一瞬アレンは理恵のことが好きなのかなと思った。

けどアレンはにこっと笑って平然と答えた。

「どういう意味って…理恵には助けられっぱなしじゃないか。だから同じ魔法使いとしてこういうときこそ僕が活躍しなくちゃってね！」

どうやらアレンはただこんなチャンスはないと意気込んでいるだけのようだ。

理恵がどうとっているかは微妙だけど…

「そ、そうなんだ…」

僕は一応あいまいに笑い返しておいた。

でも…

別に深い意味はなかったんだ…

なぜか、安心している僕がいた。

１４話　扉の彫刻（後書き）

※補足※アレンはかなりの天然キャラです；
ちなみにアレンとシルフは作者のお気に入りです☆

15話　海の神殿

神殿の中は広い台座のまわりを水が囲んでいるというかなり神聖な雰囲気がした。

「怪物はいないみたいだけど…」

僕がポツリとつぶやいたとき、神殿全体から高い声が響いた。

≪汝ら、我の相手をしたいのか??≫

嘲笑うような、いい気分のしない声だ。

「どこにいるの!?でてきなさい!」

理恵が叫んだ。

すると、ザバァっと大きな音を立てて水が跳ね、水が柱のように現れた。

柱は形を変え、幼い少女のような姿になった。

≪我の暇つぶしの相手をしてくれるのだな?≫

少女は僕達を見下して笑った。

僕はなんとなく怒りを覚えた。

なんだ!?こいつ…!!

「暇つぶしですむかな！？」

僕は怒りにまかせて剣をぬき、少女にきりかかった。

しかし剣が少女にあたった瞬間、少女の姿は水に変わりバシャっと僕に降り注いだ。

「えっ！？」

≪キャハハハッ！≫

少女の姿は水の中にとけ、変わりに甲高い笑い声だけが聞こえた。

どこにいる！？

僕は左右をきょろきょろと見回した。

そのとき、

「セイヤ！後ろだ！」

アレンが大声で叫んだ。

僕が慌てて振り向くと、少女は大きな水でできた槍を持って僕に突進してきた。

「うわぁ！？」

「光よ、守れ！ライトプロテクト！」

アレンが間一髪で呪文を唱えた。
僕の体が輝く光のシールドで包まれた。
≪なんだ！？これは！？≫
少女はわめくと、きっとアレンを睨んだ。
≪おまえから倒してくれる！≫
少女がアレンに向かって槍を構えた。
しかしアレンはそのまえに呪文を唱えた。
「光よ、守れ！ライトプロテクト！」
またしても少女の水の槍は光のシールドにあたるとともに、光に吸いこまれていった。
≪くそ！≫
少女は悔しそうにわめくと再び水に溶けた。
「また隠れた…」
僕達は注意深く水面を見回した。
いつどこから少女がでてくるかわからない。

そのとき、
バシャ！！
水がはねる大きな音がした。
「リエ！！」
アレンが叫んだ。
少女はちょうど理恵のま後ろにいた。
≪キャハハハハッ！≫
少女は笑うと理恵に向かって手をかざした。
「きゃぁ！？」
理恵の体が大きな気泡に包まれ、宙に浮いた。
≪我は知っているぞ！この魔術師は杖をこの神殿にささげたのだ！
今お前たちにはその未熟な魔術師しかいない！≫
少女はアレンを指差した。
アレンはビクッと震えたが少女に杖を向けて叫んだ。
「バカにするな！僕だって魔法が使えるんだ！」
≪ほう！ならやってみるがよい！≫

アレンは顔を真っ赤にさせ、杖を力強く握った。

そのとき、少女の口元がつりあがった。

…！！

もしかして！！

「アレン！ダメだ！」

僕は慌てて叫んだが遅かった。

アレンは少女に向かって叫んだ。

「炎よ、焼き尽くせ！ファイヤーバーン！」

アレンの杖から勢いよく炎が噴き出し、少女に向かった。

しかし、思ったとうり少女は理恵をとらえた気泡を盾にした。

炎が理恵を襲った。

「きゃぁぁぁ！！」

理恵が恐ろしい悲鳴をあげた。

「リエ！！」

アレンは蒼白して叫んだ。

気泡はたちまち燃え上がり、気泡により空中に浮いていた理恵は下に投げ出された。

「アレン！はやく理恵をうかせるんだ！」

僕は叫んだ。

アレンは慌てて理恵に杖を向けた。

「風よ、浮かべろ！ウインドゥフロート！」

理恵の体がふわりと宙に浮き、ゆっくりと地面に着地した。

「リエ！」

アレンは理恵にかけよろうとした。

それを見て少女はにんまりと笑い、アレンに水の槍を向けた。

「アレン！危ない！」

しかし遅かった。

ブシュッ！

何かが吹き出る大きな音がした。

僕は目を見張ってアレンを見た。

少女の槍がアレンの脇腹をつらぬいていた。

ドサッ！

アレンはその場に倒れた。

≪キャハハハハッ！あとはお前だけだ！≫

少女は高らかに笑うと水に溶けた。

僕は2人にかけよった。

少女がいつ襲ってくるかもわからなかったが僕はそんなこと頭になかった。

「理恵！アレン！大丈夫！？」

「ええ…私は大丈夫…」

理恵はやけどしたらしい腕を押さえながら言った。

「僕も…大丈夫だよ…」

そう言っているものの、アレンの脇腹からはドクドクと血があふれている。

とても大丈夫には思えなかった。

「大丈夫なんかじゃないよ！はやく手当しないと…」

僕が言うとアレンは大声で言った。
「まだ怪物はいるんだ！僕達を気にかけている場合じゃない！」
ちょうどそのとき背後から水がはねる音がした。
「星也！あの必殺技を使うのよ！」
理恵が叫び、アレンが僕の大剣に杖を向けた。
「地の力よ…剣に…マッドパワー！」
剣に力が宿るのを感じた。
「捕獲する蔦（アイビー・キャプチャー）！！」
僕は少女に向けて剣を向け、叫んだ。
つたが勢いよく少女にのびた。
しかし、つたは少女をからめとることはなかった。
少女がつたにからみつかれるまえに水に溶けたのだ。
≪我にそんな技がきかぬ！≫
少女が笑いながらまた水の中に消え、また理恵の背後に現れた。
≪やはりこの小娘から消してやろう！≫

少女が理恵に手をかざした。
理恵は蒼白し、あきらめたように目をつぶった。
そのとき、
「やめろ！」
アレンがふらふらと立ちあがった。
少女の動きが一瞬止まった。
そして嘲笑うようにアレンを見た。
≪ほう、まだ立てるのか？かなり深く刺したはずだが？？≫
「そうよ、アレン！動いたりしちゃダメ！」
理恵が叫んだ。
しかしアレンはきっと理恵を睨んだ。
「僕はいつも君に助けられてばかりだ！君を守るって言ったのに、君にケガさせたのは僕だ！僕はいつも、君やセイヤに迷惑をかけてばかりだ！」
アレンははーはーと荒い息をしながらも少女を睨んだ。
「僕は…みんなの足手まといじゃ嫌なんだ！」

≪なら、もう足手まといにならないようにしてやろう！死ねばそうならないだろう！？≫

少女がケタケタと笑い、槍をアレンに向けた。

アレンはふらふらになりながらも少女に杖を向け叫んだ。

「炎よ、全てを焼き尽くす竜となれ！ファイヤードラゴン！」

アレンの杖から大きな炎の渦が巻き起こった。

炎は徐々に大きくなっていき、やがてすさまじい竜の姿となった。

≪な、なんだこれは！？≫

少女が一瞬後ろにひいた。

炎の竜は少女を睨み、大きな口をあけた。

そして灼熱の炎を吐き出した。

≪ぐぁぁぁぁぁ！！≫

少女は苦しそうに一声叫ぶと形を失い、竜の口の中に吸いこまれていった。

シュッ

軽い音を立てて竜の姿が消えた。

それとともにアレンがその場に倒れこんだ。

「「アレン！！」」

僕と理恵は同時にアレンにかけよった。

アレンの顔は血の気をなくしている。

あのケガであんなすごい魔法を使ったんだ。

僕はまだアレンがあんなすごい魔法をつかっただなんて信じられなかった。

「アレン！死んじゃダメ！」

理恵が目に涙を浮かべて言った。

「とにかく応急処置を！」

「その必要はありません」

高い、美しい声がした。

驚いて振り返ると、そこにはさっきの少女のような水が形をつくった美しい女の人が立っていた。

「私が彼の傷をいやしましょう」

16話　癒しの力

「えっと…あなたは??」

「私は水の精霊、ウンディーネと申します」

女性はにこりと僕達にほほ笑みかけ、こちらに近づきアレンの上にかがみこんだ。

そして傷口に手をふれ、片手を胸に当てて祈るように瞼を閉じた。

「水よ、癒しの力よ、どうか彼にもう一度命の伊吹を…」

ウンディーネの手が光輝いた。

すると、どうだろう!

傷がみるみるうちにふさがり、アレンの顔に血の気が戻ってすやすやと寝息を立て始めた。

「すごい…」

僕は思わず息をのんだ。

理恵は心の底から安心したように微笑み、そっとアレンの髪をなでた。

僕はその様子を見て、なぜかいらだった。

なんでそんなにかまうんだ??
水の精霊の話を聞くのが先だろう??
ウンディーネはそんな僕の心を読んだように口をひらいた。
「それで、あなた達はどうしてこの場所にきたのでしょうか??」
僕はウンディーネが状況を理解していないことにも腹が立ち、イライラと剣を見せた。
「僕達はここに6つのエナジーを集めて精霊を尋ねているのです。エキドナが復活したらしいので」
「まぁ!あの暴君が!!」
ウンディーネは手を口元にあて、目を見張った。
「はい、それでこの剣に水のエナジーを授けていただきたいのですが」
僕はてきぱきといった。
「いいでしょう」
ウンディーネはおもおもしくうなずくと黄金色の宝石の上に手をかざした。
神殿が深い青色の光に包まれ、青い球体が黄金色の宝石の中に埋まった。

光がゆっくりと消えていった。

「それで、あなた方は今、どのくらいの力を集めたのですか??」

「地、風、そして水の3つです」

ウンディーネは口に手をあてておおげさに驚いた。

「まぁ！もう半分も！ですけど…」

ウンディーネは瞳にかすかに悲しみの色を浮かべた。

「全て成就することはないでしょう」

「どうしてですか??」

いつの間にか僕の隣に立っていた理恵がすばやく聞いた。

「闇の精霊、リリスは暴君の手におちています。おそらく、あなた方を敵として襲ってくることでしょう」

暴君…ということはエキドナの支配下にいるってことか??

それじゃぁ…

簡単にエナジーを授けてもらえるとは思えない。

けど、僕達はそれでも行かなければならないんだ。

「大丈夫です。僕達はなんとか説得してみせます」

「そうですか…なら、止めることはいたしません」

ウンディーネは小さくほほ笑み、理恵に視線をうつした。

「あなたは…水の力を特別に持っているようですね？」

理恵はいきなり自分にふられたことに驚き、慌てて首を縦にふった。

「は、はい。風の精霊にもそう言われました」

ウンディーネは少し驚いたように目を見張り、そしてくすっと笑った。

「シルフですか。なつかしいですね。あの精霊は本当につかめない存在です…」

ウンディーネは瞳に憂いの色をうかべて遠くを見つめた。

たしかにまったくつかめないな。

僕は苦笑しながら、水の精霊と風の精霊の間に何かあったのかなと思った。

「覚えていてください。水の力は相手を傷つけることだけではなく、時には癒しの力にもなるのですよ??」

「はい、知っています。高度な術を使えば、水は生命を蘇らせることができる」

ウンディーネはにっこりとほほ笑んだ。

「ええ、そうです。しかし、それは決してしてはいけないことなのです。眠りについた魂を呼びもどすことは許されないことですから」

ウンディーネは愛おしげに、まるで自らの娘にするような動作で理恵の頬に手を当てた。

「いいですね？水の力を使うのは傷を癒すときだけ。それをしっかり知っておいてください」

理恵はこくりとうなずいた。

ウンディーネは満足気にうなずくと、祈るように手を胸にまえでくんだ。

「それでは…あなた方のこれからの旅路が安全なものであるように…」

一瞬神殿が深い青に輝いた。

光が消えたかと思うと、ウンディーネは神殿から姿を消していた。

「闇の精霊が…」

理恵がぽつりとつぶやいた。

闇の精霊。

それはすでに敵の手のうちにおちている。

いつかはその敵陣の中に乗り込み、なんとか説得しなければいけない。

けど、少なくとも、あと2つの試練をのりこえてからだ。

火と光…

また、どんな怪物が襲ってくるかも分からない。

どんな危険な状態になるか分からない。

それでも…

僕は新たな力が宿った剣を握り締めた。

前に進んでいかないと。

僕達にはそれしか道がないんだ。

あらためて、そう思った。

17話　ふもとの町

「ねぇ、あの竜の魔法ってどうやるの??」

理恵は『海の神殿』の入口で返してもらった自分の杖を振りながら言った。

「だから知らないよ…」

それにアレンはため息をつきながら答える。

理恵とアレンはもう何度も同じようなやりとりをしていた。

今、僕達は海岸沿いを西に向かって歩いている。

次の目的地、『吹き出し火山』に向かうためだ。

「知らないはずないでしょ!?現にやっていたんだから!」

理恵はイライラと言った。

どうやら『海の神殿』でふらふらになったアレンが使った最後の魔法がよほど気になるらしい。

「だから僕は何にも知らないって!あの水でできた女の子に刺されてからの記憶がわからないんだ!」

アレンにはあのときの記憶がないようだ。

きっと気力だけで動いていたんだなぁと、僕は少し関心した。

「じゃぁなんであんなすごい魔法使えたのよ！？」

「だから知らないっていってるだろう！？」

あまりにもしつこい理恵に、アレンが怒ったように言った。

またケンカが始まった…

僕は2人を見てため息をついた。

まったく…

この2人は本当によく分からないなぁ…

僕は『海の神殿』でのことをいろいろ思い出してみた。

理恵が神殿の中に入らないとごねたときにはアレンが奇想天外な発言をするし…

アレンが倒れたときには理恵が必要以上に心配するし…

僕は最近この2人の距離が急に縮まってきたような気がして疎外感を感じていた。

それともう一つ…

かすかに感じるいらだち。

そんな感じで僕が頭を悩ませているのに…
僕はもう一度ちらっと2人の方を見た。
「もう！なんてケチな人なんでしょう！？教えてくれたっていいじゃない！」
「だからそんなの知らない！気がついたら水の精霊との話は終わってたって言ってるだろ！？」
2人は互いに一歩を譲らずギャーギャーとわめいていた。
この人たちはのんきにケンカなんてしてるし…
ホント訳が分からないよ…
僕はため息をついた。
「もういいわ！アレンがそんなケチな人だなんて知らなかった！」
「君こそ、まさかそんな人の話が聞けない人だとは思わなかったな！」
2人は互いににらみ合うと、ふんっと鼻を鳴らしてそっぽを向いた。
まだケンカしたままだが、なんとか言いあいは止まったらしい。
僕は軽く安堵の息をつくと疲れている足をまえに進めた。
地図によると、どうやらこの先に小さな町があるようだ。

別にその町の名前が書いてあったわけではないが、山のふもとに小さな家の絵が描かれていた。

そしてそんな調子で歩いているうちに…もう空はオレンジ色に染まっていた。

前方に明かりが見えた。

「あっ！もしかしてあれって町じゃないかな！？」

僕が指さすと、下を向いて歩いていた2人が同時にその方を見た。

「本当だ！明かりが見える！」

「今晩はあそこで泊らせてもらいましょう！」

2人の機嫌は少しよくなったようで、僕の足取りも自然と軽くなった。

町だ…

最近は野宿ばかりだった。

ひさしぶりに温かい屋根の下で眠れるかもしれないんだ！

そう思うと歩のペースはしだいに早くなっていった。

ついに僕達は町の小さな門にたどりつき、そばにあったベルを鳴らした。

どうやら、普通旅人などが町に入るときにはベルを鳴らすのが常識だそうだ。

やっぱりここは異世界なんだな。

僕はあらためて核心した。

しばらくして門が開き、おとなしそうな女の子が僕達を出迎えた。

「なんの用でしょうか…??」

僕達は何と答えればいいのか分からなかったので、とりあえず異世界人であるアレンにまかせようと、肘でアレンを小突いた。

アレンはあらかさまに嫌そうな顔をしたが、コホンと軽く咳ばらいして少女に笑いかけた。

「申し訳ないんですが…あっ！僕達は旅の者です！今晩、この町に泊らせていただけないでしょうか??」

少女の緑の瞳がじっとアレンを見つめた。

なぜか、少女の頬が少し朱に染まった。

「は、はい！ど、どうぞ！」

少女はしばらく固まって、そして慌てて僕達を町の中に通した。

夕方の町には、まだ人がたくさん外にでていた。

町の人達は僕達に軽くお辞儀したり、笑いかけたりしてくれた。

『商人の町』とは違って感じのいい町だな…

僕がのんびりと考えていたとき、

隣でアレンが同い年か少し年上くらいの女の子達数人に声をかけられていた。

「あの…もしよかったら私達の家にどうぞ？」

「えっ！？いいの！？それじゃぁ…」

理恵がきっとアレンを睨み、そして女の子たちに向かってはっきりと言った。

「結構よ。私達、あの子の家に泊らせていただくことになってるから！」

「えっ？そうだったの？？」

アレンがきょとんとして理恵を見た。

「そうなの！ねっ！？」

理恵は怒ったようにおとなしそうな少女に言った。

少女はびくっと肩を震わせ、こくこくと何度もうなずいた。

「ほら！気持ちだけ受け取っておくわ！…何してるの？行くわよ！」
理恵はアレンを促すとツンッと前を向いた。
女の子たちは理恵を指差して何やらひそひそと囁きだした。
アレンは理恵がなぜ怒っているのかが分からないとでもいうように顔をしかめている。
そしてアレンは急にあたりをきょろきょろと見回すと僕の横についてこそっと耳打ちした。
「セイヤ、僕の顔に何かついているのかい？なんだかすごく見られてる気がするんだけど…」
僕はまわりを見回してみた。
たしかに町の女の子たちの視線はすべてアレンに向いている。
なぜだろう？と考えたところで、すぐに理由が分かった。
今までずっと一緒にいたから何も思わなかったが、アレンの容姿はかなり整っている。
さらに金髪碧眼が重なって、そこらではめったに見られないような俗に言う美少年なのだ。
まぁ本人はまったく気づいていないようだが…
きっとあんな森の奥に住んでいたせいでまわりからの評判をあまり

聞いたことがなかったのだろう。

けど、僕はそれをわざわざ教えてあげるほどお人よしではない。

「うーん…眉と目と鼻と口がついてるよ」

かなり真剣にそう言っておいた。

アレンはますます怪訝な顔になり、そして軽くため息をついて僕達の後に続いた。

「あの…少しここでおまちください。私、お父様とお母様に聞いてまいります」

少女はある家のまえで止まるとそそくさと中にはいっていった。

そして1分もたたないうちに戻ってきた。

「あの…大丈夫だそうです…さぁ、どうぞ」

少女にうながされて、僕達は玄関を通った。

大きな石造りの家は涼しくて心地よかった。

居間にとおされると少女によく似た夫婦に出迎えられた。

「あなた達が旅の人達??あらまぁ！まだこの子と同じ年くらいなのに…」

少女と同じふわふわとした栗色の髪のおばさんが驚いたように言っ

た。

「えっと…ちょっとどうしてもやらなければいけないことがあって…」

僕は答えながら広い居間の中を見回していた。

本当に居心地のよい部屋だ。

石造りの家なのにこの部屋はまるでログハウスのような木を主調としていた。

部屋の隅ではレンガの暖炉で炎があかあかと燃え、温かい雰囲気がでていた。

「そうなのか！それは大変だな…。まぁ今日一晩はここでゆっくり休みなさい」

栗色の顎髭をはやした人のよさそうなおじさんがにっこりと笑った。

「はい、ありがとうございます！」

なんて感じのいい人達なんだ！

この町はホントにいい町だなぁ…

僕はひさしぶりに屋根の下で眠れる喜びで晴れやかな気持ちになっていた。

しかし、理恵はそうは思っていないようだ。

「ねぇ、はやくこの町をでましょう??今日は野宿でもいいじゃない！」

こそっと僕にそう囁きかけたりもしたが、僕は断固拒否した。

せっかく温かい食事までいただけることになっているのに！

野宿なんかとんでもない！

「えっと…私が部屋に案内します」

少女が言った。

少女の名前はミシェルというらしい。

またなんとも異世界らしい名前だなぁ…

僕はミシェルに気づかれないように小さく笑った。

しかし、ミシェルは僕達の名前を聞くとこらえきれないように口に手を当ててくすくすと笑った。

「お2人とも…珍しい名前ですね！」

「だろ??僕も初めて聞いたときそう思ったんだ！」

アレンが同意し、2人は僕達の名前について語りだし始めた。

それなりに盛り上がっているらしい。

おとなしそうなミシェルが声をあげて笑っている。
そんなに僕達の名前っておかしいのかな？？
やっぱり異世界の文化ってよくわからないや…
僕が軽く頭を悩ませている時、隣では理恵が怒っているような、悲しそうな眼差しで2人を見ていた。
僕達はミシェルに2階の部屋に案内されると、とりあえずふかふかのベッドに座り込んだ。
「すごい！ふっかふかだよ！？今日はこんなところで眠れるんだ！」
アレンがうれしそうに笑った。
理恵はミシェルの部屋に泊らせてもらうことになっていたが、今は僕達の部屋にきていた。
なぜか一言も話さずにムスッとしている。
アレンはそれがさっきのケンカがまだ続いていると思っているらしい。
「僕は本当に覚えてないって言うのに…しつこいなぁ…」
だとか、ぶつぶつとつぶやいていた。
そんななんとなく気まずい雰囲気の中、夕食を作ると言って下にお

りていたミシェルの声が聞こえた。
「皆さん！夕食の準備ができましたよ！」
僕達はまってましたとばかりに階段をかけおりた。
居間の大きな机にはたくさんのごちそうが用意されていた。
「これ、全部君がつくったのかい？？」
アレンが驚愕しながら言った。
ミシェルは少し頬を染めながら、こくっとうなずいた。
「お父様とお母様はお仕事にいっていらして…えっと、2人は夜勤の仕事をしているんです！だから私がつくらせていただきました。お口に合うかどうか…」
僕達はそれぞれ席についてあいさつすると、ミシェルの用意した食事にかぶりついた。
僕は初めに鳥の丸焼きをつかむとかみついた。
すばらしい焼き加減でレストランの食事よりもおいしかった。
「うん！すごくおいしいよ！」
僕がミシェルに笑いかけるとミシェルもにこりと僕に笑い返した。
けれど彼女はアレンの方が気になるようだ。

心配そうにちらりとアレンの方を見た。
アレンは感想を言うのも忘れて夢中になって食事にかぶりついている。
そしてやっとミシェルの視線に気づいたようでたった今まで飲んでいたスープの皿を置くとにこっとミシェルに笑いかけた。
「君、料理の才能あるよ！僕の母さんのよりおいしい！」
「本当ですか！？良かったぁ…」
ミシェルは顔を輝かせて安心したように手を胸のまえでくんだ。
アレンはまたスープの皿を手にとると食事に熱中し始めた。
ミシェルはそんなアレンの様子をにこにこしながら見ている。
ミシェルはアレンのことが好きなんだろうな。
そんなことを考えながら、僕もスープの皿に手をのばした。
そのときふと目の端に理恵の姿が映った。
理恵は食事に手をつけずじっと2人の方を見ている。
その瞳はうるんでいて、今にも涙がこぼれおちそうだった。
「理恵…？？」

僕が言いかけたとき、理恵はちょうどガタッと音を立てて席を立った。

アレンとミシェルが驚いたように理恵の方を見た。

「私、いらない。ごめんなさい。食欲がないの。本当にごめんなさいね」

理恵がミシェルにそっけなく言った。

「え、ええ。無理しなくて結構ですよ。どうぞ上でゆっくり休んでいてください」

ミシェルは心配そうに言った。

理恵はミシェルに「ありがとう」と笑いかけるとさっさと上の部屋にあがっていってしまった。

僕はその瞳から涙がこぼれおちるのを見た気がした。

理恵…??

一体どうしたんだろう??

理由はすぐに分かった。

ああ…

そうか。

僕はさっさと自分の分を食べ終えると席を立った。

「ごめん。僕、理恵が心配だからちょっと見てくるよ」

「そうですか。それでは…」

ミシェルが慌てて何かをお皿に盛りつけはじめた。

それは理恵が残した残飯だった。

ミシェルはそれを少しづつ皿にもりつけると僕に手渡した。

「リエさん…お腹がすいているかもしれませんから。よかったら渡しておいてください」

「うん、わかった」

僕は皿をうけとりうなずいた。

そして急いで理恵のいる2階へと階段を上っていった。

18話　町での夜

ガチャ…

僕は小さな音を立てて部屋の扉をあけた。

理恵はベッドに座ってうなだれていた。

「理恵…??」

僕が呼びかけると理恵は驚いたように顔をこちらに向けた。

けど、すぐに僕から目をそらしそっけなく言った。

「星也??何の用??」

何の用って言われても…

「君が食欲ないっていうから…心配になってきただけだよ」

僕はミシェルに渡された皿を理恵に差し出した。

「ミシェルが君を心配していたよ。ほら、君がお腹を空かせてるかもしれないから持っていけだってさ」

理恵はちらっと皿を見たがふいっと顔をそむけた。

「私、いらない」

「でも…」

僕は言いとどまった。

多分理恵に何を言っても今は食べようとしないだろう。

無理にすすめることもない。

「じゃぁここにおいておくから…お腹がすいたら食べてね」

僕はミシェルに渡された皿を近くの机の上においた。

理恵は皿の方を見ると黙ってうなずいた。

「……」

「……」

2人とも何も話さない沈黙が続く。

僕はたえかねて理恵の隣にぼすっと座った。

いきなりこんなことを聞くのもなんだけど…

「ねぇ、理恵は…アレンのことが好きなの??」

理恵の体がびくっとふるえた。

「ど、どうして…??」

理恵がおずおずと顔をあげ驚いたように僕を見た。

「見てたら分かるよ」

僕は苦笑した。

理恵の様子を見ていたらどんな鈍い人だって気がつかないはずがない。

まぁそれでもアレンは気がついていないんだけど…

理恵はとまどうように視線をさまよわせ、ぽつりとつぶやいた。

「…うん、そうなの。私、初めてあったときからアレンのことが好きだったの」

理恵の顔が林檎のように真っ赤に染まった。

「初めてあったときから??」

僕は思わず理恵の言葉を繰り返した。

理恵がアレンのことを好きだということは気が付いていたが、まさか初めてあったときからだとは思わなかった。

だって理恵はそんなそぶり一度も見せなかったのだから。

僕は記憶をたどって見た。

僕が気がついたのは『海の神殿』あたりくらいからだ。

けど…

そうだ…

『風の神殿』でのシルフの言葉への反応。

どこかずっとひっかかっていた。

僕はあのときからうすうすと気が付いていたのかもしれない。

「はじめはアレンが異世界の人だからだと思った。ただ、異世界の人に興味があるだけだと思ってた。けど違ったの」

僕はアレンに初めてあったときのことを思い出した。

空を飛んでいた不思議な少年。

まるでおとぎ話にでてくるような姿をした、異世界の少年。

「けど、アレンがシルフにのっとられちゃうんじゃないかってとき、アレンがアレンじゃなくなるって思ったとき、胸が張り裂けそうになった。そのとき初めて自分の気持ちに気がついた。」

理恵は少し間をあけ、そしてたしかめるように言った。

「ああ、私はアレンのことが好きだったんだって」

ズキッ！

なぜか、胸がしめつけられるような痛みに襲われた。

なんだろう…？？

この気持ち…

「そのことに気がついてアレンを見ることが多くなった。一緒に旅をしているうちに彼のことが分かってきた。だんだんと彼への想いが大きくなっていった」

理恵は遠くを見つめると口元をゆるめた。

「ほら、アレンって普段なさけないでしょ？だからほっとけないの。それなのに…ときどきびっくりするほどかっこよくなって…」

理恵が熱っぽく言った。

そしてふいにうつむいた。

「でも私、アレンのまえじゃ素直になれないの…本当はケンカなんかしたくないのに…すぐにケンカになってしまう」

僕は理恵の話をほとんど聞いていなかった。

頭の中にふいにある疑問がうかんできたのだ。

僕は…

理恵のことをどう思っているんだろう…？？

僕と理恵はずっと一緒で兄弟みたいな存在だった。

でも、本当にそれだけ??

本当に兄弟だと思っているのなら、どうして今こんなにアレンがうらやましいと思うんだろう??

いきなりでてきたくせにずうずうしいとか思うんだろう??

どうして…

こんなに胸が苦しいんだろう…??

理恵の瞳に涙があふれてきた。

「アレンは私のことなんてなんとも思っていないの。きっといつもケンカになる苦手な人だとか思われているに違いないわ!」

理恵はふいに僕の方を見た。

理恵の頬につぅっと涙がつたう。

その表情に、ドキッと心臓が高鳴った。

「ねぇ、星矢…私、どうすればいいの??私、アレンが他の女の子と話しているのを見るたびにこんなに苦しい思いをしなくちゃいけないのは嫌…!」

僕は気づいた。

気づいてしまった。

僕は…

理恵のことが好きなんだ……

「理恵…」

僕は理恵を抱き寄せた。

理恵は驚いたように目を見開いたが抵抗はしなかった。

「せ…いや…??」

「それなら…アレンを好きで辛いなら…僕のことを好きになってよ」

僕は自分が言っていることが良く分からなかった。

けど、このチャンスを逃したら、理恵は僕の気持ちに気がついてくれないと思った。

「僕は、理恵のことが好きなんだ」

理恵の体がびくっと震えた。

理恵はなんて答えてくれるんだろう??

少し小さな期待を抱いてみる。

けど、僕にはその答えがなんとなく分かっていた。

理恵はゆっくりと手をのばすと僕の肩において自分から引き離した。
そして僕に向かって悲しげにほほ笑んだ。
「ごめんなさい。私、星矢の気持ちには答えられない」
理恵は立ち上がるとミシェルに渡された皿を手にとった。
「おやすみなさい、星矢。明日のためにもゆっくり休みましょうね」
そう言い残すと理恵は部屋を出ていった。
パタン…
ドアの閉まる音が響き、部屋には僕一人だけが取り残された。
1人きりになった部屋で、僕は軽く苦笑した。
僕はなんで理恵を好きになってしまったんだろう??
理恵は本気でアレンのことが好きなんだ。
僕は絶対にかなわない恋をしてしまったんだ。
なら、僕に一体何ができる??
僕は何をすればいいんだろう??
答えはすぐに見つかった。

なら僕は理恵の恋を応援しよう。
僕は理恵が幸せになれるのなら…
それでいいんだ…
そのとき、扉のドアが開く音がした。
僕はちらっと扉に目をやった。
入ってきたのはアレンだった。
…いや、違う。
シルフだ。
僕はなぜか、瞳の色を見ずにすぐそのことが分かった。
シルフは僕ににこやかに笑いかけた。
「そろそろあなたがこの少年と話したくなるころかと思いましてね。お連れしましたよ」
シルフはそう言うと僕の隣に腰かけた。
たしかに…
今、僕はアレンと話がしたい。

けど、何を話せばいいんだろう??

僕が迷っているとシルフがにこりと僕に笑いかけた。

「大変ですね。けど、迷うことはない。この少年に自分の気持ちを打ち明ければいいのです。あなた達は友達なのでしょう??」

友達…

そうだ。

僕とアレンは友達なんだ。

短い間しか一緒にいないけど、それでも一緒に危険を乗り越えてきた友達なんだ。

だから…

理恵をアレンが幸せになればいいんだ。

そのために僕が言わなければいけないことは…

よくわからない。

けど、なんとなく大丈夫な気がする。

「…うん。」

僕は力強くうなずいた。

「そうですか。まぁ、恋愛とは大変なものですよ。人はそれを乗り越えて強くなるのです。私も…そんな時期がありました」

シルフは遠くを見つめて憂うように言った。

そして僕にもう一度やわらかく笑いかけると瞳を閉じた。

やわらかい風が髪をなびかせる。

隣に座っている少年が瞳を開いた。

鮮やかなブルーの瞳がきょとんと僕を見つめる。

「…セイヤ??僕、いつの間にここに…」

「アレン、話したいことがあるんだ」

アレンはいきなりのことに驚いたように口をポカンとあけていたが僕の表情を見て黙ってうなずいた。

さて、何から話そうか。

考えようとしたところで自然に口が開いた。

「君は理恵のことをどうおもっているんだ??」

「リエ??」

アレンは驚いたように目を見張った。

まさかいきなり理恵の名前がでてくるとは思わなかったらしい。
「うーん…どう思ってるって言われても…友達かな??」
アレンは考えるように首をひねりながら答えた。
「よくケンカするけどね」
そしてそうつけくわえると軽く苦笑した。
…やっぱり、アレンは何も思っていないんだな。
けど、僕は理恵のためにできるかぎりのことをしたい。
「僕は理恵のことが好きだ」
「えっ…??」
アレンはぽけっとして僕を見た。
「今、なんて言ったんだい??」
「僕は理恵のことが好きだ」
僕はもう一度繰り返した。
それでやっとアレンは言葉の意味を理解したようで顔をしかめながら僕を見た。
「セイヤ…??それ、本当??」

「本当だよ。冗談なんかじゃない」

僕ははっきりと言った。

アレンの表情が少し曇ったような気がした。

「…ふーん。そうなんだ…けど、リエのどこがいいんだい??ちょっと気が強すぎるんじゃないか??どうせならもっとおとなしい…そうだな、ミシェルみたいな…」

アレンの言葉に僕は少しいらだちを覚えた。

どうして…

理恵のことをそんなふうに言えるんだ??

どうして理恵はこんなやつのことが好きなんだ??

「そんなの君の好みだろう??僕は理恵が好きなんだ。だけど…」

僕はこぶしを握り締めた。

このことを…

アレンには言いたくない。

それでもしアレンが理恵のことを見るようになってアレンが理恵のことを好きになってしまったら??

たとえ2人が両想いになっても、そしてそれをお互いに気がついたとしても、僕達は一緒に旅を続けなければいけない。

理恵がアレンと幸せそうにしているのを見て僕は耐えられるだろうか??

どうせならこのまま…

アレンが理恵のことをなんとも思っていない状態でほおっておけば…

いつか理恵もあきらめて僕の方にくるかもしれない…

一瞬、そんな考えが頭をよぎった。

しかし僕は頭をぶんぶんとふった。

いや、僕は理恵の幸せを願うと決めたんだ。

理恵の恋を応援すると決めたんだ。

なら、やっぱりアレンにこのことを伝えなければいけない…

僕はゆっくりと口をひらいた。

「理恵は…君のことが好きなんだ」

アレンが大きく目を見開いた。

信じられないとでもいうように顔をしかめる。

「セイヤ…??何言ってるんだい??そんなわけないじゃないか」
アレンは僕が冗談だというのを待っているかのように僕の瞳をじっとみた。
「…冗談なんかじゃないよ。さっき理恵が言っていたんだ」
「リエが??」
アレンは一瞬固まってそして笑いだした。
「セイヤ!そんな深刻な顔して言ってもばればれだよ!大体僕とリエはいつもケンカばかりじゃないか!そんなことあるはずがな…」
「ほんとなんだよ!!」
僕は思わずアレンに向かって思い切り怒鳴った。
アレンはビクッと体を震わせ固まった。
「僕もそれがウソだったらどれだけうれしいか!でも本当なんだ!理恵は本当に君のことが好きなんだ!」
瞳に涙があふれた。
僕はそれをアレンに見とめられないようにアレンに背を向けた。
「セ…イヤ…??」
アレンが困ったような声で僕の名を呼んだ。

「僕は…理恵にふられたんだ。理恵は君が好きだからって…」

僕はそれ以上言葉を続けることができなかった。

アレンは何も言わずに僕の肩に手をおいてつぶやいた。

「ごめん…」

しばらくためらうような間があいた。

そして聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声がした。

それはまるで僕に言っているのではなく、自分自身に話しかけているような声だった。

「けど僕…今、自分の気持ちがよくわからないんだ…」

18話　町での夜（後書き）

やっぱり前編と後編にわけるのをやめてくっつけました。
ややこしい感じになっていますがご了承願います（ぺこっ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8382h/

不思議の冒険

2010年10月10日16時33分発行